

来世之有無

79

601

013778-000-3

79-601

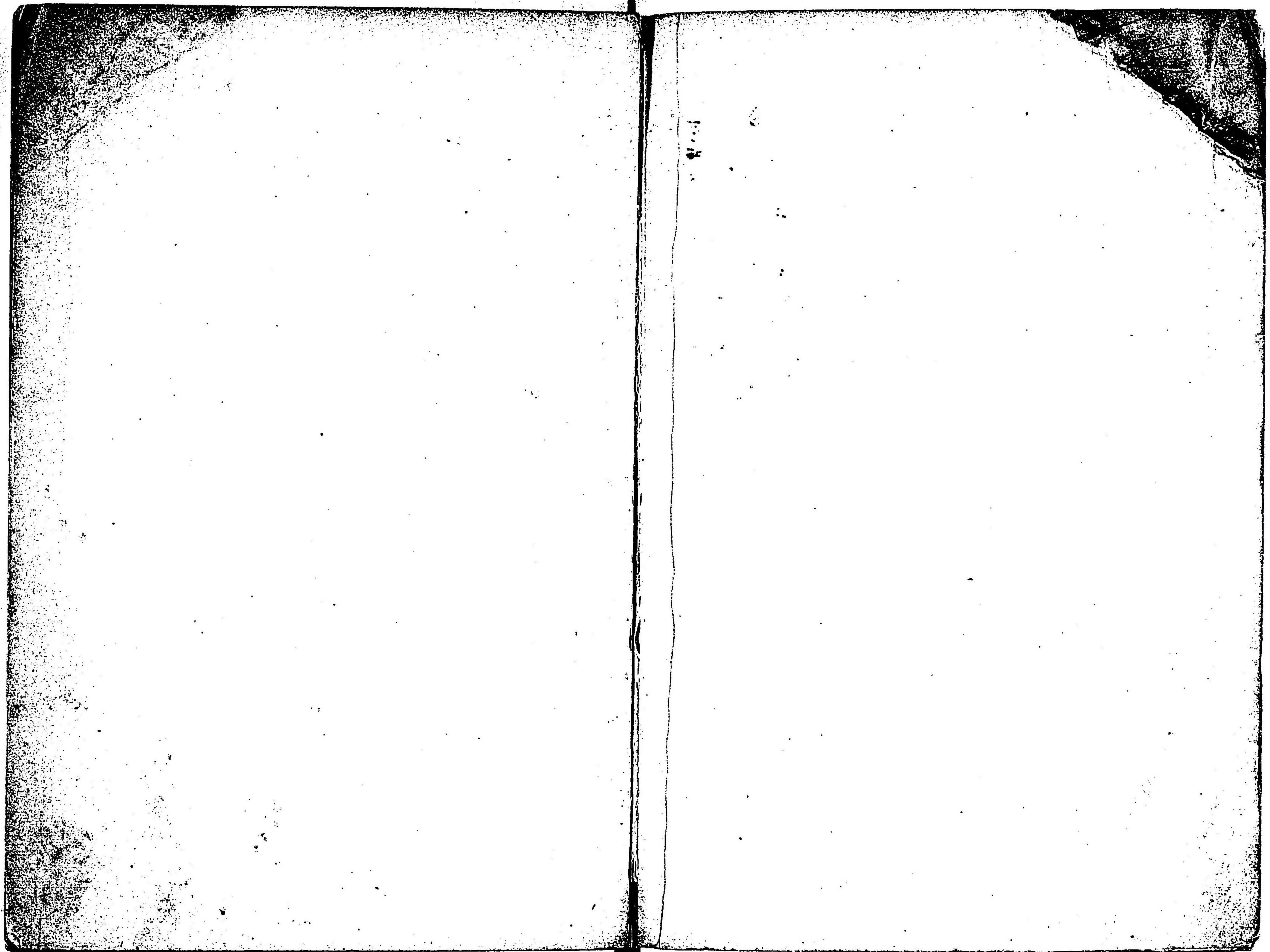
来世之有無

新仏教徒同志会／編

M38

ABA-0268







出  
生  
有  
無

明治  
33 8 14  
印交



世  
出  
有  
無

明治  
38 8 14  
内交

# 新佛敎徒同志會綱領及規約

## 綱 領

- 一、我徒は佛敎の健全なる信仰を根本義とす
  - 二、我徒は信仰及道義を振作普及して社會の改善を力む
  - 三、我徒は宗教の自由討究を主張す
  - 四、我徒は迷信の勦絶を期す
  - 五、我徒は從來の宗教的制度及儀式を保持するの必要を認めず
  - 六、我徒は宗教に對する政治上の保護干渉を斥く
- 
- 一、本會の會員たらんと欲する者は會員二名以上の推薦に基き評議會の決議を以て之を許す
  - 二、前條の推薦者を得難き者にして入會せんと欲するときは評議會が提出する條件を充實するを要す
  - 三、評議會は其の決議により前二條の規定に依らずして入會者を推薦することを得
  - 四、會員は毎月會費金拾五錢以上を納むべし
  - 五、本會の事務所は東京市本郷區駒込片町十六番地に置く

## 約 規

### はしがき

未來世界の有無は、從來宗教上に於ける大問題、殆んど根本の問題として認められたり。然れども、これ果して、しかく宗教の成立に根本の基礎を與ふべき大問題なるか、よし然りとすも、如何なる意味に於て根本の大問題なりや、これを研究するは、少くとも頗る興味深き事項に屬す。今我徒は『新佛敎』第六周年に際し、廣く諸大家の此の問題に對する所見を請ひて之を世に公にするもの、所以なきにあらず。蓋し之によりて、本邦中流以上の人士が、此の問題につき有する思想の大體を窺知するに不足なかるべければなり。我徒は、謹しみてこゝに諸氏の其の高見を寄せらるゝに吝ならざりし厚意を鳴謝す。

一、本篇を編するに當り、諸家に發して其の回答を乞ひし要點は、之を「未來世界の有無」、「其の有無を斷する理由」、「若し有なりとせば其の狀態如何」といふ三項に分ちたり。

一、回答を請はんがため發せし端書の總數は、百八十餘枚にして、中回答を得たるもの八十五、回答を得ざるもの約七十、回答するを得ず、若しくは回答の要なしと

の返書を得たるもの總べて三十なり。

一、回答せず、若しくは意見なし等の返書も、或意味に於て、一種の意見と見做すことを得るが故、本篇中には、省略せずして特に之を掲げたり。

一、事情のため、回答するを得ずとの返書は、初め單に其の芳名を列擧する豫定なりしも、其の事情を明示するは、至て趣味深きを覺えたるか故、これまた敢て本編中に收めたり。

一、字傍の圈點は、編者私に之を加へたるものにして、特に要點を知らしめんがためにしたるなり。

一、平井金三、忽滑谷快天、等の諸氏は、殊に本問題につきて、一大論文を草して寄與せらる、實に我徒の光榮とする所なり。

一、卷末に、我徒同人の所見を附す。敢て諸大家の班に列せんとするにあらず、たゞ各思ふ所を言ふのみ。

明治三十八年六月下旬

編者識す

### 來世之有無目次

(到着順)

- 山縣博三郎君(一) 加藤弘之君(一) 浩々洞晴君(一) 田中智學君(二)
- 大道長安君(二) 嘉美忍成君(二) 大内青樹君(三) 江原素六君(四)
- 佐治實然君(四) 高島平三郎君(五) 志賀重昂君(五) 堺 枯 川君(六)
- 石川三四郎君(六) 三 並 良君(七) 藤岡勝二君(八) 鈴木券太郎君(八)
- 藤井瑞枝君(九) 山藤貞夫君(九) 清水友次郎君(一〇) 木下尙江君(一一)
- 山縣五十雄君(一一) 坪内雄藏君(一二) 伊藤まさ子君(一二) 忽滑谷快天君(一二)
- 釋 宗 演君(二三) 松本文三郎君(二三) 人見忠次郎君(二三) 幸田眞伴君(二三)
- 中村謙梁君(二四) 加藤玄智君(二四) 石川成掌君(二五) 川合清丸君(二五)
- 濱 口 撥君(二五) 石黒忠憲君(二六) 關 野 貞君(二六) 前田 麗 雲君(二六)
- 波邊國武君(二七) 小具貞子君(二七) 吉田 賢 龍君(二七) 大澤岳太郎君(二七)
- 奥村五百子君(二八) 與謝野綾幹君(二八) 本田増次郎君(二八) 建部 遜 吾君(二八)
- 井上圓了君(二九) 釋 濟 潭君(二九) 小林日薫君(三三) 大塚保治君(三三)
- 辻 新 次君(三三) 留岡幸助君(三三) 辰巳小次郎君(三四) 田中弘之君(三五)
- 石井光綱君(三五) 下田次郎君(三六) 釋 盛 照君(三六) 新波貞吉君(三七)
- 齋藤唯信君(三七) 山内晋桐君(三八) 下田 歇 子君(四〇) 片山國嘉君(四一)

- 大瀬甚太郎君(四一) 梅原 融君(四一) 野々村 直太郎君(四一) 廣井辰太郎君(四二)
- 櫻井 義 隆君(四三) 島田 三 郎君(四四) 龜谷 天 尊君(四四) 南條 文 雄君(四五)
- 常盤 大 定君(四六) 重野 安 禎君(四六) 村上 專 精君(四六) 谷 本 富君(四七)
- 岡田朝太郎君(四八) 三島 中 洲君(四八) 柿崎 正 治君(四九) 角田 柳 作君(四九)
- 山路 愛 山君(五一) 寶山 其 雄君(五一) 高木 壬 太郎君(五二) 三輪田 眞佐子君(五三)
- 加藤 文 雅君(五三) 伊藤 銀 月君(五四) 原 千 代 子君(五六) 香 取 秀 眞君(五八)
- 湯本 武 比 古君(五八) 後藤 宙 外君(五九) 内田 周 平君(五九) 戸 水 寛 人君(六〇)
- 茅原 華 山君(六〇) 丸山 通 一君(六〇) 棚橋 一 郎君(六二) 富士 川 游君(六二)
- 海老名 正君(六三) 萩野 仲 三 郎君(六四) 波邊 又 次 郎君(六四) 平 井 金 三君(六五)
- 澤柳 政 太 郎君(八六) 青柳 有 美君(八七) 徳富 猪 一 郎君(八八) 梅 謙 次 郎君(八八)
- 中島 力 造君(八八) 中島 徳 藏君(八九) 中島 半 次 郎君(八九) 丸 井 圭 次 郎君(九二)
- 平子 鐸 嶺君(九二) 忍月 信 亨君(九二) 棚橋 祐 子君(九三) 井上 哲 次 郎君(九三)
- 島地 囀 雷君(九四) 大鹿 愨 成君(九五) 近 角 常 親君(九六) 黒田 眞 洞君(九六)
- 桑木 殿 眞君(九七) 根本 通 明君(九七) 桑原 隆 藏君(九七)
- 融 道 玄(九八) 橋 惠 勝(九八) 毛 利 栗 庵(一〇〇) 伊藤 左 千 夫(一〇〇)
- 境野 黄 洋(一〇一) 高島 米 峰(一〇三) 中村 勝 山(一〇三) 田 中 治 六(一〇三)
- 加藤 嶋 堂(一〇四) 和田 寛 二(一〇四) 古川 流 泉(一〇五) 杉村 經 積(一〇五)

# 來世之有無

新佛教徒同志會編

山縣 佛三郎君

自分ことと科學のものに對しては、問題あまりに六ヶしく、何共御答申上蒙候。されど、自分が一身を世に處する上に於ては、固より來世の有ることを信じて、及ぶべきだけ、最善の生涯を送り、所謂「I have done my duty.」の一語を遺し、心に満足して、此世を辭したきものと覺悟致居候。(六月六日)

## 二 加藤 弘之君

僕は、どう考へても、來世があらうとは思はれぬ。何故ならば、今日迄、科學的に、來世のあるといふ證據が出て來ないから。(六月七日)

## 三 浩々洞 諸君

御懇書拜讀仕候、愈々御盡誠、奉謝候。御申越の儀、昨今、先師清澤の法事などにて、

取紛れをり候間、御免下され度候。いづれ其中に、御面談の機あるべくと存候。早々。(六月七日)

四 田中智學君

貴會倍々御隆盛奉賀候。御紀念のため、論文御募りの趣にて、弊主人へ御照會相成候處、生憎、先頃來、眼病にて、執筆相廢し、専ら静養加療中に有之候につき、乍遺憾、宜敷御斷り申上候様との事に候。右御回答まで、早々。獅子王文庫執事(六月七日)

五 大道長安君

拜復、老生儀、過日信越地方より歸京仕候處、腦病を發し、一切休息仕候につき、乍遺憾、御高命に難順候間、此段御慈照願上候。草々不一。(六月七日)

六 惠美忍成君

仰々しく起稿すべき程の問題とも思はねば、經濟的に御照會の復信用紙を以て鄙見を述べんに、先づ「來世」と云ふ語の意義を問ふ票あり、墓を超えて向ふに來世ありや否

や、と云ふ如き意味の「來世」なれば、余輩の見解は「是れなし」といふの一語にて盡せり。若し之に異なり、來世は未來世界の略語にして、其未來世界と云ふは、必ずしも吾等が死後を云ふに在らず、明日とか、來月とか、來年とか、乃至は此世界の將來を云ふの意に解すべしとせば、所謂「來世」論は極めて重大なる考察問題たるべし。されど記者諸氏が聽かんとする「來世」の意義は、寧前者に在るが如く、所問の要點は、極樂とか地獄とか云ふ様の信仰を、持せる否やを檢せんとするならむ。聰明なる記者諸氏にしては、随分馬鹿氣たる試問を出したるものかな。此の如き問題は、來世と云ふよりも、靈魂滅不滅論を掲ぐるの趣味多く適切なるに加かじ。要するに余は、彌陀經等に説くが如き、形體を具へたる來世世界あるを信する能はず。さりながら、吾等が理想士として、宇宙の終局目的を達したる光明士として、幾億萬年の後、此世界を極樂化すとの信仰は、嚴に把持する所。そは余が向上心を策勵する理想境なり。即ち來世の二義中、前者を否認し、後義に就て信仰を立つ。(六月七日)

七 大内青巒君



御端書拜見仕候、陳者、當家主人義、過般九州地方へ旅行仕、當今不在中に御座候。尙本月末ならては、歸京不仕候事に確定相成候條、折角ながら、あしからず御了承被成下度、先は不取敢右返答まで、勿々拜具。大内青巒留守居(六月七日)

八 江原素六君

拜復、新佛教紀念號に關して、江原素六氏に宛御通牒有之候處、目下同氏は、滿韓地方出張中にて、今後四五旬を過ぎて歸京の豫定に御座候故、到底御通知期日までに、貴需に應じ難く候間、右御斷迄、此段申上候。草々頓首。麻布中學校(六月七日)

九 佐治實然君

個人意識が、永久相續することは、勿論のこと、存候。其理由は、原始的動物の心的状態より、現今の人類の心的状態まで、向上發展致し來りしものが、忽焉として消散すべしとはおもはれざればなり。而して來世の状態は、矢張り今日の如し。歴史の示す通り、多少の變遷あることは、申すまでもなきならん。小生は、個人として過去の記憶なきゆへ、來世の有無如何を疑ふ人を、笑止千萬と存じ居候。何となれば、人は

幼時の記憶すらなきにあらずや、况や過去の事を覚えて居るはずなしと被存候へばなり。小生は、人は矢張りに生るべしと信じ居候。臨終正念、又は平生業成を勸むるも、幾分の眞理ありと被存候。其は、現在幾十年の行業は、來世の生活の狀態に大關係のあるとは、毫も疑を存すべき餘地なければなり。(六月七日)

一〇 高島平三郎君

拜復、御問合せの來世といふこと、所謂天國とか地獄とかいふ意味の來世に候は、小生はかゝる事に就いては、曾て考へ不申、随つて有とも無とも申上難く候。以上。(六月七日)

一一 志賀重昂君

來世に就き、御高問の處、小生の如き大俗物は、此の如き問題に應答すべき資格あるものに無之。尙又、戰地に於ける基督教徒の行動を見るに、極めて實行的に、且兵士の生活に適切なる助力を致し、而も之を少費額にて爲し遂ぐるには、小生は基督教徒に非ざるも、殊の外嘆服致候。或は曰く、宗教家は、實行的などいふ淺薄なることを

要せず、來世の有無、其理由及狀態等、此の如き高尚なる問題を解釋するを以て弘願とすべしと。或は然らん、果して然らば、窮竟は、一切衆生をして生死中の善死、最勝の死を得せしめ、以て來世には、不毀の極樂淨土に入らしむるにあるべし。然れば、宗教家自ら無礙の淨信を懷きて、死生の間に解脱し居らざるべからず、而も戰地にある佛教各宗派の布教使、慰問使なるもの、軍人が死生の間に談笑する實際を見て、心に耻ぢざる者幾人かある。愚見にては、來世とか、其有無とか、及狀態とかを問答するよりは、更に佛教徒の盡すべき事業、目前に山積致居候と確信致居候に付、唯今御書面を入手するや否、早速此義を以て申上候上、却て御高見の程奉伺上候也。早々拜復。(六月七日)

一一 堺 枯 川 君

どうも、そんなものがあり得るとは、思はれませんが。是が僕の「高見」です。(六月七日)

一三 石川三四郎君

今の我がある以上は、どうしても、來世が無ければならぬと思ひます。併し今の所、たゞ夢の様に思ふて居るのみです。(六月七日)

一四 三 並 良 君

拜啓、「來世に就て」小生の意見御問合せに付き、平常考ふる所を申述候。小生は、來世のあるとを信じ申候。これは、精神と肉體とは、各々別の本體を有する者と考ふるが故に、有は無となる能はずと云ふ理論の自然の結果に御座候。然し、物心、關係は如何、其の形而上的説明は、到底吾人の能くする所にては無之候。又來世の狀態は如何、思ふに吾人は、意識的存在を繼續し、恐らくはカントの云へる倫理上の向上は來世に於てあるべく、又智的發展も止むとはなからんと存じ候。然し、其の詳細なるはとて吾人の推理の及ぶ所には無之候。さればとて、全く空想をなすと禁ずるの必要もなきと存じ候。以上申述べ候來世の狀態も、空想と云へば空想には候へ共、人間が倫理的ならんとする限りは、制するを得ざる推理と存じ候。空想も決して唯だ空想なりとて棄つべきものには無之候、人生には、事實よりも空想の方、有力、有功

なるもの有之候。之を悟らざるものは、とても哲學、文學、藝術、さては宗教のとを語るに足らざる者と存じ候。先は貴答迄、如此に御座候。草々。(六月七日)

一五 藤岡勝二君

來世(來るか來らぬかが問題なんだらう、もし未來世なら、未だ來らないのだから今は無である。)とは、來らむ世といふこととせう。世とは何とせう。精神界も世といへばいはれるし、物質界をも亦さう名けられると思ふ。未來の物質界、精神界も、さて我に向て有るか無いかも問へるし、一般に於て有無を論ずる人もあるだらう。我に向ての有無を云はんとすれば、我の未來存在を先に尋ねないとわからない。一般に就て彼は云ふも、我がことを出立點にしてゐるにちがひないから、畢竟我の繼續存在からさめなければならぬ。理由も状態も(状態とは、有とした上の事だらう、無の状態は無だから、からっぽである)我から我がふところを云つて見るに限るから、先づ御返事のはしくれとして、かして。(六月七日)

一六 鈴木券太郎君

ドエライ問題を出して、大に驚いたよ。僕共に分ると思つての御質問か、馬鹿らしい。的の字盡しに、大に論じ大に書いて、博識の先生方を驚かしてもくれべーと考へ見申したが、根が腦みその硬化して居る方故、よい思案も出ないよ。僕は來世ナンか無いと思つて論じて見たし、その状態も考へて見たいが、矢張り、文庫的の陳列に止まつて、御なぐさみにもなるまい。此處は残念口惜しいが、願下げと出掛ました。(六月八日)

一七 藤井瑞枝君

來世があるかないか、スツベツタ、コロンダ、そんな事は、哲學的にも、宗教的にも、色々な誤議論が、澤山ありませうが、吾等の様な泥凡夫には、チンブンカンブン、チツトモ分りませぬ。併したゞ、今世に於て、深く宗教を意識し。宗教的「ライフ」を送りたいのが、吾等の希望であるけれども、煩惱具足の此身を以て、飯にならぬ婆に居ては何事もハヤ……。(六月八日)

一八 山脇貞夫君

吾人の心靈及之より生ずる行爲を支配するものは、法、徳、教、是なり。法律は犯罪として其違背を禁遏し、道徳は背倫として其非違を壓迫す。於是、宗教が其神聖を維持せんとは、來世を假設するより他に途なし。故に來世とは宗教の善に對する獎勵惡に對する虚喝に過ぎず。パラダイスありと説き、惡人は地獄に墜つと云ふものありと雖も、古來之を立證したるもの一人もなく、一旦罪人として刑辟に觸れたるものが來世に於て地獄に陥り、再度の罰を受くるは不公平の甚しきものにして、又現世に於ける邪惡が、來世に於てまでも問責せらるゝ理由なく、若しありとせば、其來世は所謂「來世」に非らずして、現世の延長に過ぎざるなり。人若し事物の有無に就て惑あるときは寧ろ「ナシ」として處理するに如かず、之れ法律上過誤少なき方策とす。余輩は既に來世なきものと信するが故に、其狀態如何に關しては、之を説明するの義務なし。(六月八日)

一九 清水 友次郎君

小我大我の融合、不可言不可説の妙境界なるべし。若し強ひて類比を求めば、生前、

熟睡、若しくは美に撃たれたる瞬時のそれにも似たらんか。

實を申せば、我は孔夫子ならねど、未だ現在を知らず、焉んぞ未來をやに御座候。唯御所望に任せ、生が當今の知識からの、ほんの推察を申上げ候迄に御座候。(六月八日)

二〇 木下 尙 江 君

余は「來世」の手を待ちつゝあることを信ず。予は絶えて久しき「來生」に逢はんがために、刻苦勉勵しつゝあり「來世」は猶ほ戀人の如し、此の卑心醜情を以て戀人を見んことは、耻つかしさの限なればなり。彼女は光なり、予は彼女を想ふことに於て、言ふべからざるの歡喜を催ふす。(六月八日)

二一 山縣 五十雄君

拜啓、私は來世はあると信じて居ります。信仰でありますから、その理由を論理的に述ぶることは出来ませぬ。その状態については、何等の idea もありません。(六月八日)

三二 坪内雄蔵君

折角の御申入に候へ共、かゝる宗教上の大問題は、小生その任にあらずと存候間、御断  
申上候草々。(六月八日)

三三 伊藤まさ子君

御文うれしう拜し参らせ候、御申越の御事、私ナシカはとても駄目にて候へ共、銀月  
が、何か少し書くと申居り候。(六月九日)

三四 忽滑谷快天君

來世に關する説明に大別して二種ある、一は通俗的、他は學術的である。通俗的來世  
説にも二種ある、一は吾人が犬馬牛羊等の下等動物に再生したり、又は天上界の衆生  
の如き高等なる動物に再生したりするといふ説、即ち原始佛教の輪廻説のやうなもの  
である。二は吾人が死後再生せずして靈魂と稱する一種の存在物となりて、天國、淨  
土若しくは地獄にて苦樂を受けるといふ説、即ち猶太教、基督教、回教などの俗説で  
ある、學術的來世説にも種々ある、一は萬有は唯心のみである、此心の中に有生無生

の物の種子がある、故に此心が迷執を離れない以上は、吾人は輪廻を免れないとの説で  
ある。二は萬有の本源は眞如である、冥諦である、梵天である、故に吾人は迷執を脱  
せざる間は生死するが、一度迷執を離れば本源に復歸するとの説。三は宇宙の萬有  
は非物なる一實在の顯現である、此實在は無窮であるから吾人も恒久であらねばなら  
ぬとの説である。以上は古今の來世説を無理に概括した分類であるから、満足のもの  
ではない、併し極めて大體をいへば右の外に出てぬと思ふ。

通俗的來世説は「我」が何等かの生物に再生するとか、靈魂となつて存在するとかい  
ふのであるから洵に明白である。之に反して學術的の來世説は理窟が多いだけ却て不  
明瞭である。即ち純粹なる唯心論や、超絶的なる一元論によると、來世の状態は「存續」  
といふことの外に少しも知れない。

次に來世は全く無い、吾人の死後、吾人の物質的個體が破壊すれば吾人も瓦石と異ら  
ぬ、靈魂などいふ存在物が残る筈はないといふが唯物論の歸結である。此論は最も明  
白である。之に反して折中者は、物質は不滅である、勢力は恒存である。吾人は物質的

體軀と勢力的精神と二つ備へて居る、故に吾人の死後にも精神の存在を否定することはできぬと唱へる。然れども吾人の精神が死後如何なる状態にて存在するかは論明した人がない。また一派の折中論者は謂く、靈魂不滅といふは吾人が精神上の現象は死を以て滅却すべきものでない、未來永劫人生に存続して行く、孔子は死すと雖も孔子の精神と人格とは今も尚ほ活動しつゝある、釋尊は入滅したけれども佛陀の法身は常在靈鷲山である。是の如く論じて得意の色があるやうだ。併し精細に考へて見ると此折中説は實際に於ては物質論と同一である。何となれば物質論とても人格の感化を否定するものではなく、又精神を勢力の一としたなら物質論も異議はないのである。吾人は以上の諸説には満足ができ兼ねるによりて、少しく自説を陳へることにしやう。吾人の所謂來世とは「我」の再生するといふ、例せば蠶が成長して繭を作り、變化して蛾となり、交尾して種子を生み、更に孵化して蠶となる、始の蠶は今世の蠶で、次の蠶は來世の蠶である。また例せば梅の樹が生長して花を開き實を結んで地に落ち、其實が生長して梅の樹になる、前の梅は今世の樹で次の梅は來世の樹である。また例

せば一個の動物が分離して二個の動物となり、一本の草木が分化して二個以上の草木となる、前者は今世にて後者は來世である。人間も其通りて、一個の人が生長して種子を下して子を生む、前者は今世で後者は來世である。梅の子は梅の親が再生したと同じくして人の子は人の親が再生したといふより外に考へて見やうはない。親の眼つきが其儘其子に現はれ、親の口もとが其儘其娘に見え、親の髪の色が其儘に子の頭に生ひ、親の聲色が其儘子の喉に現はる。而して叮嚀に穿鑿して見ると子の身體といひ精神といひ一として其兩親及び、兩親の兩親その兩親の又兩親、一言にいへば祖先より受けて居らぬ所は一つもない。而して一種の特徴が數代を隔て、子孫の上に現れることがある。されば子の身心は兩親のそれ等のみよりは説明ができぬけれども、祖先へ溯りて見れば、何でも説明ができる。即ち人間に無用なる機官の備つてあることさへ動物の祖先に溯れば明かに理由が了解せらるゝやうなものである。故に人間は祖先以來幾代も幾代も再生し復活して、今日の吾人に至つたのである。是を以て吾人の所謂來世は確實に在る、即ち子孫である。吾人が來世の状態は即ち子孫の状態である。此論は如何

なる恐人にも解るであらうと思ふ。然れども茲に一個の疑問が起る、即ち個人にして子孫がなかつたなら、其人の來世は無いのであるかといふ疑ひである。これに對へて吾人は子孫なき個人にも來世はあるといはねばならぬ。何となれば、吾人は來世とは『我』の再生するをいふと前に定義してゐた。先づ『我』とは如何なる者を指すか、通途の考にては『我』とは個體其物である、吾人の身體は假我で、吾人の精神は内我である、此二者を合して『我』といふて居る。吾人の意見にては、身體と精神とは同一存在である、別物ではない、廣くいへば物質と精神とは同一である、これを立證するには長々しい證明を要するから、今は略して結論だけを用ひる。即ち吾人の身心を一括して個體とする。此個體のみを『我』と指すのではない。何となれば個體のみを以て『我』と心得て居るは世人の迷執である。甲の個體は乙の個體から獨立しては居るが孤立しては居らぬ。例せば茲にAなる人がある、Aの骨格は其兩親の骨格、否、其祖先の骨格と同じである、Aの骨片の一片片が、仔細に穿鑿すると、長さ遠き變化を透して祖先より再生復活して來たことが知れる、Aの血液も、Aの筋肉も、Aの頭髮も、Aの鬚髯

も、Aの爪齒も、Aの眼瞳も、Aの耳口も、Aの手足も、Aの胃腸も、Aの智能も、Aの感情も、Aの意志も、仔細に點檢すれば必ず、Aの兩親及び祖先のそれが再生復活したことを認めることができる。加旃、Aの智識はAの先覺の智識であり、Aの衣服はAの同胞(廣き意の)が織れる所、Aの家屋、Aの食物、Aの書物等それ／＼Aの同胞の供給した所である。さすればAを其兩親及び其祖先から分離せしめ孤立せしめることはできぬ。Aと其祖先とは血脈流通して殆んど分離すべからざる事、恰も樹木の幹根と枝葉との分離すべからざるが如くである。果して然ればAの個體のみを以てAの『我』といはれぬ、Aの『我』の中には、當然Aの兩親及び其祖先を含まねばならぬ。次にAの兩親に三人の子があつたと假定すれば該兩親は三人の子となりて再生復活したのであるから、Aも其兄弟たるBもCも同等に兩親や祖先の再生である、依てABC三人は同一人の分身である。故にAの『我』の中にはB、Cの個體も含まれてある。斯の如く次第に『我』の範圍を擴張すると、一家族より一種族となり、一社會となり、一國民となり、全人類を『我』の中に含むやうになる。故に『我』といふ語は廣さ

意義にては、生物全般をも含むけれども、實際上其やうに廣くせずして充分である、即ち人類、更に狭くして一民族に止めて置いても差岡はなからう。

却説、前にいふた個人に子孫のない場合に來世はないかといふ疑問に戻りて考ふるに、當該個人は子孫がなくとも、之と同一人たる兄弟姉妹に子孫があれば、來世の復活はてきて居る。若しまた兄弟姉妹一人も残らず子孫がないとしても、彼等の両親の兄弟姉妹に子孫があれば、當該方面にて『我』は再生しつつあること明かであらう。吾人に子孫のない場合を譬へば、梅の樹があつて、毎年毎年花が咲き實を結びて、其實が八方へ散亂して、獨立の梅の樹が幾十本もできた、其幾十本の梅の樹の中に、一つ花の咲かぬ實の結ばぬのができたと同してである。一つの樹は實はなくとも、他の同一の梅の樹が盛んに繁殖して居るから、梅の未來は安全である、人間もその通りである。

以上の如く考察すれば、吾人の來世とは、一民族若しくは一人種、一人類の未來といふことになる、さすれば少しも疑はしい點はない、併し、是の如き考察は吾人の精神的、道徳的、宗教的の方面に、一向、没交渉である。右様の論は生物學にて聽を厭さるは

ど聞いて居る。來世といふにはモ少し深遠な幽玄な説がありさうなものだと思ふ人が多からう、されど吾人は世の人々が平凡無味と思ふて居る此『子孫來世説』に甚深の意義を見出すのである。何となれば、第一に此説によれば古來の來世説を悉く網羅することが出来る。見よ三世因果靈魂轉生の説は極めて愚説のやうであるが、過去の因が現在の果を生じ、現在の因が未來の果を生じ、善因善果、惡因惡果といふが其骨子である。然り而して吾人の『子孫來世説』は此理を正確に示すに足る、即ち祖先なる過去世に經驗し、動作し、習得し、進化した所は今日吾人の現世に悉く結果して居る。祖先の智徳上の進歩が今日の文明を形成し、祖先の動物的弱點が今日の蠻風となり、祖先の善業は今日の善果となり、祖先の惡業は今日の惡果となりて顯れて居る。故に今日吾人現世の進歩と退隨とは、未來世の盛衰を決定する重大の要素である。吾人が一度『我』の過去を見、『我』の現在を察し、『我』の未來に想到したならば、何人と雖も奮然興起せねばならぬ。且つ『我』の觀念を訂正して其意義を擴めるから、極端なる利己主義を根本より打破して、吾人の理想を高尙ならしめ、永久なる人類の未來の爲めに努力す



る神聖なる献身的行爲を奨励する。また『子孫來世説』は基督教、猶太教などの死後靈魂が神の裁判を受けて賞罰に預かるといふ俗説の真意に違ふ。何となれば當該俗説の吾人に教へんとする所は、吾人が善惡の行爲に對して神か賞罰を加へるといふにある、吾人は宇宙を以て神と思ひ、宇宙の進擧を神の意志の表現と見るから、神其物に就ては基督教と相容れぬ點がある。然れども神の何者たるかに論なく、神の本意は正善にあると信じて道德的向上を吾人の理想とし、平和、自由、平等、眞理の爲めに今世に努力したならば、吾人の子孫即ち『我』の未來は幸福が増し、平安を來し、慰籍を得、光明を仰いで一步一步天國の階段に昇るのである。之に反して吾人が今世に神を信せず、背逆を旨とし、諍亂、私慾、狹頗、虚偽の生涯を過したならば、吾人の子孫即ち『我』の來世は罪惡を來し、不幸を増し、憂苦を重ね、暗黒となりて地獄のトンネルに進入すること明々白々である。故に基督教、回教等の俗説をも訂正して、其荒唐なる怪談を除いて眞正の意義に復歸せしむることができらる。復次に唯心縁起説の要は三界の依正二報は皆自己の所造であるといふにある。而して極端なる觀念論を唱道して哲學的思辨を

弄したのは其本旨ではない。思ふに極端なる觀念論は、極端なる物質論と同等の僻見である。殊に佛教の唯識説は哲學的學説としては餘りに幼稚である、要は三界の諸法が自己の所造であると自覺せしむるを旨とする。されば此點に於ては、吾人の『子孫來世説』と一致する、何となれば『我』の意志は人生の未來を決定する大動力にして、人生の事情と境遇とは、皆此『我』の意志にて造り出したのであるといふが、吾人が主張する所である。但し佛教の説は概して輪廻生死を道るゝを以て極致とするけれども、吾人の『子孫來世説』は輪廻生死を以て結構のこととし、未來に再生し復活して愈々益々向上して理想の圓滿に近くのである。されば此點に於ては、大いに佛教と矛盾するやうに見える。されど大乘諸家の説必ずしも生死を厭ふにあらざるは、何人も承認する所と思ふ。復次に吾人が『子孫來世説』の立脚地は、物心一如の所にある、靈魂といひ、精神といひ、物質といひ、勢力といひ、決して別物ではない、同一存在を觀察點の異なる所より異名を附したに過ぎぬ。故に之を呼んで眞如と名くるも可、法性と名くるも可、梵と名つくるも可、冥諦と名つくるも可、大極と名つくるも可、實在には二つは

ないのである。且つ生死を離れば真如はなく、諸法を除いて別に冥諦はなく、現象の外に實在があるてはない。是を以て吾人の死輪廻。再生復活は眞如實相の妙用で、諸佛法身の妙徳が現れたのである。是の如く觀察する時は吾人は決して唯物論者の如く卑陋なる物慾を充足し、下等なる快樂に耽るの弊に陥る憂はないと思ふ。

果して然れば吾人の『子孫來世説』は平凡にして幽玄の意義があり、明白にして深奥の理を含み、合理的にして宗教の眞理に契ひ、唯物的にして唯物の弊に陥らず、現世的にして來世の信頼を確實にし、吾人の實際社會に於ける處世の方針を健全にし、人生に限りなき希望と光明とを與ふるものと信ずる。(六月九日)

二五 釋 宗 演 君

折角の仰せに候へ共、明後日渡米致候に付、尊慮に従ひ兼候間、不惡御承認被下度候。  
釋宗演侍者 (六月九日)

二六 松本 文三郎君

拜啓、新佛教も六週年と相成り、目出度奉存候。乍去、小生頃日は、肺炎にて打臥候座

紀念號には、乍遺憾一言をも呈すること能はず、右不惡御諒察被下度候。草々。(六月九日)

二七 人見忠次郎君

自分は、生れて今日に至るまで、極めて僅か(時間の際限なきに比較して)の時間に於ける經驗により、常に過去あり、常に現在あり、又常に未來あるを信せり。此間に、自分の思想と身體構造の材料とは、常に新陳代謝して、限りあることなし。今後も亦然らざる能はずとの見地より、來世ありと信ず。否來世なき事を信ずる能はず。單に常識ある者は、一、二、三の數の觀念あるも、Imaginäre Grossen の觀念皆無なり。然れども専門家は、即ち之れあるを知りて、研究せるにあらずや。我等を無智無識。決して來世なしと斷言するの勇氣を有せざるを自白す。(六月九日)

二八 幸田 露伴君

拜答、御尋の來世の有無、まだ、見ぬことに候へば、何とも御答申上兼候。たゞ王右丞の詩の句に、

有無は斷常の見、生滅は幻夢の受。

と有之候を、面白しと愛誦致し居り候。詩を賞するに理屈なし、そのわけは存じ申さず候。草々頓首。(六月九日)

二九 中村諦梁君

拜啓御照會の趣領承仕候、問題の來世の有無、その理由、及び、状態は、極めて緊要にして、極めて困難の事と存候。上下三千年、幾多の哲人によりて繰返されつゝ、今に明快の解決を得ざる此問題は、人に靈のあらん限り、情のあらん限り、有、無、疑惑の三説共に存立するならんと存候。來世存在論は、人文の進歩と共に消滅せんと推定する論者も有之候へども、小生はしか信せず候。一見最も非論理に見ゆる此説は、最も人心を慰藉する説と存候。事實に於て最も有効の説と存候。而して小生は、來世の存在を仰信するものに候。盲信とも見ゆべく候。(六月十日)

三〇 加藤玄智君

拜啓、平素御無音に打過候段、御海容被下度候。扱又、紀念號御發行は、誠に結構に

存候。然る處、小生は、親類に昨年より大患に罹りしものと、出産さわざとにて、目下大取込致し居候間、到底今回は御間に合かね候と存候へば、不惡御承知被下度願上候。草々不一。(六月十日)

三一 石川成章君

目下試験やら何やかやにて、到底執筆の暇無御座候、何卒御赦免被下度候。(六月十日)

三二 川合清丸君

拜復、陳者、來月は、御機關雜誌第六週年に相當候由、目出度奉賀候。隨て卑見投書の義御申入被下候處、小生儀宿痾再發、依て表書之處へ轉地療養、筆硯暫相違さげ居候折柄に付、起稿無覺束、此段御回答申上候。草々。(六月十日)

三三 濱口擔君

拜復、新佛教紀念號御編輯に付、御照會に有之候處、小生來る十三日より、滿韓旅行に出立のため、彼れ是れ多忙、貴需に應じがたく、不惡御了承被下度候。早々。(六月十日)

三四 石黒忠憲君

來世の有無、其理由及狀態等御尋の處、此問は、極めて六ヶ敷疑問と存候。少くも來世に於てならでは、確たる御答は出來不申候。但し小生は、來世の有無に不拘、現世に於て善をなし惡を爲さず候へば、來世がありともわるさ目には逢ふまじと確信いたし、善事を勉め惡事を戒め居申候。右の外、御答可致持説等無之候也。(六月十日)

三五 關野貞君

拜復、陳者、小生は、來世の事につきましては、從來何の考も無之、隨て意見を陳ぶるの資格無之者に候。過般篤疾にかゝり、竊に遺書を裁して手術臺に上り、生死の境に彷徨せし際にも、來世の有無は終に念頭に浮び申さざりき。右折角の御垂問に付、御返事迄申上度候。敬具。(六月十一日)

三六 前田慧雲君

拜復、「來世」に就て、意見御徵集相成り候處、拙者は來世は可有之と存居り候へ共、學問的に之を論述することは、今早速之間に合ひ難く候間、此段御斷り旁申述候也。

(六月十一日)

三七 渡邊國武君

過現未三世。浮漚幾去來。大聲喝破去。其響雷雷雷。(六月十二日)

三八 小具貞子君

拜復、陳者、紀念號御發行には問題御指示被下候處、不肖なる私、意見等は無之候間、此段御返事申上候。(六月十二日)

三九 吉田賢龍君

御來狀の趣承り候が、來世問題につきましては、纏りたる意見無之候ま、雜誌掲載の榮を荷ひ難く候間、左様御承了被下度候。但し、好き思ひつきの紀念號、發刊なる事、いづもながら感服の至りに候勿々。(六月十二日)

四〇 大澤岳太郎君

御申越の問題につき、小生は別に意見無之、隨て何等御返事申上兼候間、不惡御諒承奉願候拜具。(六月十二日)

## 四一 奥村五百子 君

拜復、私事時局のため、昨今日の眩る程多忙にて、寸暇無之、誠に残念ながら、此度は折角の御好意に相背きます。(六月十二日)

## 四二 與謝野鐵幹 君

小生は彌陀如來の誓願を信じ申候。時々うはへの心には、疑惑も起り候へども、奥に潜める心は、之をあたさましき事に思ひ居り候事。たしかに御座候。草々。(六月十二日)

## 四三 本田増次郎 君

一、來世はありと信ず。

一、理性と人情の要求に應ふが故に。

一、理想の實現さるゝ所。(六月十二日)

## 四四 建部 遜 吾 君

人は社會に生れ、社會に没す。過去は社會なり、現世は社會なり、來世も亦社會なり、人は社會に由り社會に於いて永遠の生命を有す。(六月十二日)

## 四五 井上圓了 君

貴答、拙者近頃腦病にて、大に思想力を減じ、殊に健忘症の氣味なれば、左の拙作一首を以て貴答申上候。

痴病未醫又健忘。今來古往兩茫茫。有人問我他生事。五里霧中奈望洋。(六月十二日)

## 四六 釋 清 潭 君

長い浮世に短い壽命、有耶も無耶も五十年、現世も來世も何のその、飲めや歌へや舞へ騒げと云ふの類は、先づ來世を否定したるものでしよう。善知識様の仰せを有り難く頂戴して、睡ても覺めて南無阿彌陀佛、嗟子ナンマミダと云ふの類は、先づ來世を認定したるものでしよう。惜い事には、此の二類共に、人に依て左右せらるゝ者で、實は現世も知り得るものでなし、況して來世をやです。ケレド、此の二者ありてこそ、蓮宗淨土宗も立ち、眞宗も立ち居ります。飲め歌への否定先生が進軍すれば進軍するほど、南ンマミダの認定派は退却せざるを得ない譯でしょう。是に於て認定派の勇將狂僧は、一生懸命否定派の進軍を防ぐに力じます。正直に申せば、蓮眞二宗の如きは、

來世の二字を取り揚げらるれば、全く空拳の亦た成すべきなく、戰鬥力は消滅する譯です。來世の二字は實に金城と爲り、鐵壁と爲り、巨砲と爲り、第一現世に大切の生命を保持する飯粒と爲るのです。是れ蓋し逆眞二宗のみならず、從來の佛教家は、皆な然りと申して差支ないと思ひます。佛教家のみならず、キリストも亦た、來世の二字が必要の器械と成つて居るのでしよう。サレバ宗教は、來世を認定した上に建立し來るものと見て宜しからむ。サレバ認定派の見地よりは、來世は必有と信ぜらるゝのですし、一方浮世派の見地よりは、來世は必無と信ぜらるゝのでしようが、大凡そ物の有無は、形成したる上では判じ易く、亦た議論の起るべき筈無けれど、來世の如きは、形の成立せざる上のことであれば、從て判じ難く亦た議論の起るべきものでしよう。是故に愚者でも、全く佛學を知らざる者は、或は中江兆民の如き説を唱へるのでしよう。兆民彼れ一代の快男見たるや稱するに足るも、惜いことには、唯識も知らなければ華嚴も知らず、亦た天台も知らず、私を以て彼を評して見ますれば、浮世派の發達したる者としか考へられませんが、其れは兎に角、私の考にて、來世の有無と云ふ

ことを御返事致しますれば、來世は猶雲の如しと申しました。晴天白日、雲の所在を求めて東奔西走終に雲は有りませんが、天が少し雨氣を催し陰暗に成り來るや、何處とも無く雲は湧然として起り、或は蓋の如く、或は龍の如く、奇怪變幻、殆んど、窮まり有りません。故に雲は無しと云ふものは晴天に空を見て陰天に空を見ざる人てしよう。雲は有りと申すものは、陰天を第一に見たる人なのです。亦た來世は人に於ける病氣の如しと申しました。一生健全で藥一服吞まずに死んだ人も有りますが、此人は病氣が外に發せないばかりで、僥倖にも他からは無病の人だと云はれました。うが、其人に病の性質が全く無いとは断定出來ません。何か食物が悪るかつたとか何とかで、病氣が出ないとも限りません。是故に天に雲を生じ人に病を生ずること等は、有無を畢竟論ずべきもので無いと考へます。若し之を論ずれば、兒童の見たるを免れません。但し今日生存の釋清潭なる者が此世で死んで、次ぎの世まで釋清潭が今日の如く生るゝや如何と云ふの問題は、中中六ヶ敷様ですが、私は矢張り雲の如しと御答へ申すより外有りません。談議僧の説教を聴きますと、「魂が此の身體を出て獨りボ

ツボツ行くときは「なんぞと申して居りますが、此人達は、魂と云ふものを烟の様に見たのでしようが、烟が來世に行て亦た人に成るとは可笑しき話してす。私しが研究しました天台などは、今生來生を説きますに、肉身の五蘊、法性の五蘊と申すことを立てます。色受想行識の五蘊を離れては、別に人と云ふもの有りませぬ。其の色受想行識が死ぬ時は、悉く分離するものです。此の五蘊が分離しては、何の活動も出來んのです。而して此の五蘊は父母より得來るのですが、此の父母より得來る所の五蘊は、五十年六十年にして分離し、此肉身は腐敗するのですが、一微塵ばかりの識が相續して、次ぎの世に移り、其次ぎの世が淨土であれば即ち法性の五蘊と合體して、肉身の五蘊と同じく、一個の形を生ずるのです。彼の彌陀も、大日も、阿闍も、寶生も、地藏も、皆な此の法性の五蘊相成の人なのです。されど其識が因縁が無ければ、何處ともなくブラッといて歩いて居るものと見えます。是れ私しが雲の如しと申した理由なのです。「世界因縁成」の語は眞實であらうと考へます。僧傳を讀んで見ますと、唐の終南山道宣律師は、梁の僧祐法師が再生だと書いてありますし、我邦の源實朝は、南山律

師の生れ替りなどありますが、是れ或は事實かも知れませぬ。因縁有るが爲め此の如きことの有る筈です。故に來世は雲の如しと見るが、私は面白きことと思ふ中江兆民や、浮世派の斷無説は、私しは排します。(六月十三日)

四七 小林 日 董 君

復啓、拙僧、目下、頻死の病氣にて執筆に不堪候間、御斷申上候。早々。(六月十三日)

四八 大塚 保 治 君

御尋の問題は、小生未だ十分研究不致、何とも御答致兼候、此段御斷申上候也。(六月十三日)

四九 辻 新 次 君

御書面拜見致候處、小生に於ては、目下別に考案も無之に付、右御承知被下度、先は御返事迄、早々。(六月十三日)

五〇 留 岡 幸 助 君

未來の有無、未來はありと信ず。

その理由 只キリストの教訓を信ずるのみ。

その状態 は、元よりその實況を穿つに由なしと雖、怠惰漢が勞役場にありて、徒食するが如きものにはあらず。何にか最も幸福に、且つ最も有益なる仕事を與へられ、神命に軌掌するものならんと信ず。(六月十三日)

五一 辰巳小次郎君

吾人の思想に浮ぶ所、其の内、或は知るべからずして信ずべきものあり。來世の實存、其の一なり。來世の實存、吾人、論議によりて之れを定めんとするも能はず、是れ知るべからざる所以なり。勸善懲惡の法、安心立命の道、世に缺くべからずして、此の法と道とをして成立せしむるに、其の據依すべき所以の根柢なかるべからず。故に來世實存の信を必要なりとす。而して想像は現世の情態を模型として來世の情態を描寫す。故に來世情態の説は、國風民俗(即ち國土の天文、地文、民人の來歴氣質、等)により異なるざるを得ず。従つて甲國土の教旨を乙國土に傳へ、甲時代の法義を乙時代に弘めんとするには、變造改作をなさざるべからず。(六月十三日)

五二 田中弘之君

來世は必ず有之候ものと相信じ居候。其の理由は、今日があるから明日があり、明日があるから今日がある如くに可有之候。

状態の儀は、此の飯袋相破れ、實驗の上ならては相分り不申候へ共、此世で、二六時中、貧乏神の包圍攻撃を受けつゝあるよりは、確に安樂ならんと確信仕居候。尙一言ねたと思へばまた夜が明けて

あるはないはの喧嘩面

然るべく御取捨願上候。頓首。(六月十三日)

五三 石井光躬君

拜呈、宗教は單に人心の弱點に成立するものか、將全心に慰安を與へて確固たる主義を示すものか、其後者を宗教成立の實相とせば、來世の想像の如きは、一の愚痴の涙の塊に過ぎざるべく、唯奮勵以て其理想の實現を求むべく候。此確固たる全心の落着所たる點より宗教を見れば、其想像の如きは、亦一の迷信に過ぎざるべく候。(六月十三日)



五四 下田次郎君  
 來世なるもの無し。

一、物質を離れてエネルギーなく、エネルギーを離れて物質なし。この兩者は共存不離なり、又前後なく同時にあり。

二、身體は複雑なる物質の結體なり、精神はこの身體に相當する複雑なるエネルギーの作用なり。而してこの兩者は同時にあるものにして、何れを因とも果とも言ひ難し。

三、身體瓦解すれば、エネルギーも活動の形を變ず、故に身體死すれば精神もこゝに其の終りを告ぐ。而して身體を組織せる物質、及分解せられたる此物質と伴ふエネルギーのみ永劫に存す、もし不死なるものを求むれば、此原始的の物質とエネルギーのみ、他は一切無常、况んや其暫時の結合たる個人をや。(六月十三日)

五五 釋雲照君

拜啓御申越の件、戒師和上は、近頃非常に御多忙にて、期日に應ずる機執筆難致候間

不惡御了承被下候様との事に御座候間、一寸御回答仕置候也。目自僧園侍者。(六月十三日)

五六 斯波貞吉君

拜啓、小生は、來世に就いては、全く何等の考を有せざるものに有之候。否寧ろ來世ありとなすの理由を見出す能はざるものに有之候。隨て釋迦の教義にも、基督の教義にも、信を措く能はざる次第に御座候、但し、其言行は、大に模範とすべきものありと信じ、其點に於て、之に倣はんと欲するものに有之候。早々。(六月十四日)

五七 齋藤唯信君

未來の有無は、好個の問題にして、亦難解の問題也。然れども其所謂有と云ひ無と云ふは、畢竟自己の意識の範圍内に屬するものなれば、意識に離れて有なることなく、亦無なることもなし。故に意識にして有なりと思はゞ有なり、無なりと思はゞ亦無なり、有無何れに在りても是非なし。要は道義の實踐に於て、孰れか吾人に多大の反省を促がすか、是れ此問題に對する最終審判なるべき也。(六月十四日)

(1) 凡佛教教理に於て、過去現在未來の三世は、大略左の如く解説すべきか。

第一

佛教外

進化論……父祖(過)……自己(現)……子孫(來)

佛教内

儒教……父祖……自己(積善一變)……子孫(餘慶)……増上果に當る  
一生運時期の變化(刹那の三世)……學理としてのみならず内面の實驗としても亦必要なり下に  
生涯の前後に亘りて……蓋し本運の來世は之に屬す

(2) 最後の生涯外に亘るもの他面より觀は

第二

迷界

因(善)、○果(樂)……人天  
因(不善)、○果(苦)……三惡道

悟界

因(未悟)……菩薩、○果(既悟)……佛、佛果は三世の外に超越するや否や下に脱くべし

迷悟は佛教の根本義、而して迷界に善惡の比較的價值を認むるは、宗教と倫理とを調和すべし。

(3) 更に他面より觀は

第三 迷界

果……有情……生物……境遇……共業不共業に由りて同中別あり  
因……惑業……善不善

悟界

果……有情……佛、菩薩……總攝別願に由りて同中別あり  
因……願、行……自利利他

迷界の因果は主として機械的なり、悟界のは、同時に結局的なりと見るべし。  
(4) 更に又他面より觀は

第四

迷界

平等觀……(凡情)……遍計所執……情有理無……蛇  
差別觀……(凡智)……依他深分(即遍計の兩觀)……現象……繩

悟界

差別觀……(權智)……依他淨分  
平等觀……(實智)……真如……圓成實性……本體……麻……理有情無

本體即現象、現象即本體、遺物、凡情凡智に由りて着彩せらる。朽繩は蛇に似ればこそ蛇とも誤らるゝなれ、迷界の緣起是なり。悟界は、智(菩提)より觀は斷證あり、若理(涅槃)より觀は萬德湛然、麻繩本來縛捉の用あり。要するに平等平等、物我一如、理智不二なり。只是一物、凡聖見る所、有無正に反す。中に非ず外に非ず、而も中、而も外、佛果の外に超越するや否や。且本題に關して、只來世の有無のみならず、現在の有無果して如何、現前芥然の一念、將た有か將た無か、心佛及衆生是三無差別。(華嚴經)三世十方を打して情有理無なるが故に無と謂ふべく、理有情

無なるが故に有と謂ふべし。而も凡聖有無、同時に共に存せず、譬ば晝夜明暗の如し、明處暗なく暗處明なし。翻轉若くは顯現を謂ふべきも、決して往來昇沈を謂ふべからず。我及び世界を擧げて、俄然状態一變すと謂はんのみ。其迷悟の状態の詳細の如きは、經論所説、印度固有の思想に假借する所多し。只其信すべきを信せんのみ。而も只信すべしと謂ふ、敢て知り得べしと謂はざるなり。…但願空諸所有慎勿實諸所無。…(龐居士)

(5)終りに内面の實驗に就ては、現在一生、吾人胸間、善惡橫生、苦樂轉眼、…此濁惡處、地獄餓鬼、畜生盈滿(觀經)…何ぞ必ずしも彼三惡道を現在已外に求むるを要せんや。始めて本佛の救済に接するや、…阿彌陀、去此不遠(同上)…一たび曙光を見る、必ず吳日あらん、何ぞ亦必ずしも娑婆即淨土と速了するを要せんや。(六月十四日)

五九 下田歌子君

拜復、節格の御依頼に候得共、過日來、亡母の忌中に籠り居候と、近頃健康すぐれず

候間、今回の處は意見御披露致しかね候間、御斷り申上候早々。(六月十四日)

六〇 片山國嘉君

拜復、御申越の件に付ては、甚だ乍遺憾、近頃非常に多忙を極め、到底卑見を靜陳するの暇無之候間、不惡御許容被下度願上候、終に臨み、貴會の御隆盛を奉祝候。(六月十四日)

六一 大瀬甚太郎君

拜啓、御申越の來世に就きては、小生は「未だ其の存在を認むべき理由を發見せず」と申す簡單なる理由を以て其の存在を否定致候につき、此段御回答申上候也。(六月十五日)

六二 梅原融君

小生は、來世は無論有之候事と存候。どうか來世には、モ少し有爲なものとなりて出て來たしと存候。さて其理由は、、、ア、大分六ヶ敷し、是にて御容免被下度候。已上。(六月十五日)

六三 野々村直太郎君

一、有無、宗教の要は、詮ずるところ信の一ツに歸するか故に、信を外にして、來世ありといふも又無しといふも、畢竟閑人の臆語に過ぎざらむ。信の上にては、來世ありといふも、又無しといふも、千葉萬紅、いづれも目出度からずや。

二、理由、有と無とは、論理上明かに矛盾なり。只信の上にては此の如くにして相妨げず。見るべし、信仰は純理の沙汰に非るを。有りといふにも理由なく、無しといふにも理由の用なし。

三、状態、地獄も極樂も、十人十色が面白からむ。佛もかく説かれたる様承知せり。是非は全く相わからず、謹て教を乞ふ。(六月十五日)

六四 廣井辰太郎君

(一) 來世の有無——存在を信ず。

(二) その理由——現今の學說、勢力不滅の理を以つて推す。

(三) その状態——實質的に現世と異ならず、恰も現今の我と將來の我との如し。

余の來世觀は右の如し、極めて平凡且つ單純なり、然れどもこれ學理の與へ得る最高

の説明なり、たい恐る、是或は問題の眞意にあらざることを。余想ふ。問者の意は蓋し個人的靈魂の有無を質すにあらん、果して然らんには、余は來世觀の人の精神に於けるは、恰も醫藥の病者にやけるが如しと答へんのみ。何人も醫藥を服用せざるべからざるの理なし、而して亦何人も來世を信ぜざる可からざるの理なし、否な醫藥によりて其健康を補ひ、或は來世の信念を以つて心的生活の支柱たらしめざる可からざるが如きは、共に變性的人格の要求に出でたることを知るを要す。余は目下如此信念の必要を感じず、去りとして余と同一の信念を人に強ふるの理由を認めず。(六月十五日)

六五 櫻井義肇君

小生は、來世有無の理由や状態に就て、利た風の愚説明を長々と持ち出だし、XをYに代へる丈けに、可惜時間をツブス様な奴が大の嫌ひに候。

小生は、其理由も知らず、其状態も分らず、又是を詮索しようとも存せず、唯何かなしに來世は有りと信じ申候。

ソシテ今度死んだら、矢張り人間に生れて、而かも日本の東京附近で、清き健全なる

中等社會の家庭に生れたきものと念じ居り候。(六月十五日)

六六 島田三郎君

來世の有無は、自己の淺智を以て測り知るべしと覺えず候間、我崇敬する聖哲が有りとしへる言を信じ、其れ以上は、李丹の左の言の如く覺悟いたし居候。

天堂無則已。有則君子登。地獄無則已。有則小人入。(六月十五日)

六七 龜谷天尊君

來世の有無は、重大なる問題にして、輕々に論斷すべからず。然れども、今姑く余の信ずる所の、華嚴法界觀によれば、來世は眞に有りと信するなり。而して其の理山、及狀態等は、杜順、至相、法藏等所談の、周遍含容觀。重々事々無碍觀を見れば明かなり。(三世觀は華嚴經離世間品に詳かなり)

十玄門中の十世隔法異成門は、過、現、未の三世を以て吾人の一念となせり、其説に曰く、十世とは、過去、未來、現在の三世に各々過未及び現在ありて、即ち九世と爲る、而して此九世迭に相即また相入して、一の總句を成し、總別合して十世を成す、

是の如く十世別異を具足して、同時に顯現し三世を失せずと。又華嚴經(不思議品)を見るに曰く、

過去劫入未來、現在劫入過去、未來劫入現在……、或長劫入短劫、或短劫入長劫、或百千大劫爲一念、或一念即爲百千大劫、有劫入無劫、無劫入有劫……

過去是未來、未來是過去、現在是過去……  
以上の理によつて、余は未來の有るを確信するものなり、蓋し吾人の心靈は不生不滅なり、吾人の肉身却て心靈中に在り、譬へば心靈は大海の如く、肉身は大海の一漚たるに過ぎざるなり、是の如く吾人の心靈は、不生不滅にして、而かも絶對無限のものなるときは、三世共に吾人の心靈上の一念に存在す。通玄論に曰く、十世古今、始終不離於當念。

右貴問に御答申上候、拜復。(六月十五日)

六八 南條文雄君

拜復、本月四日附を以て、「來世について」とある問題の下にて、來世の有無その理由

及状態等を申上候様御申越に候處、吾人は未だ來世の經驗無之者に候間、幼年より聽聞致居候三世因果の理法を信し、且つ應信如來如實言の祖語を遵奉して、來世には往生成佛の素懷を遂げ、還相回向の大用をも顯はし得べきこと、確信致居候事に御座候。以上。(六月十五日)

六九 常磐大定君

拜復、何かな起稿可致存居候處、病人が出來たり、他に焦眉の急に迫れるもの有之候ため、遂に期日に至るも出來致しかね、何とも御申譯無御座候。早々。(六月十六日)

七〇 重野安釋君

拜啓、主人事病氣のため、鎌倉へ轉地致し居候まゝ、失禮仕候、此段御断りまで、草々。重野留守宅(六月十六日)

七一 村上專精君

吾々が死後に於て、極樂とか地獄とか、または人類動物とかに轉生して、更に第二の生活を營むことか、實際あるものか、即ち輪回轉生てふことは、事實であるかどうか

てふことは、容易に極められぬ問題である。佛教の如きも、一方より觀れば有輪回説であるが、更に他方面より考察すれば、全く無輪回説である。即ち悟の方よりいへば無輪回であるが、迷の方よりいへば有輪回となりて居る。畢竟輪回は、吾人迷情の上こそあれ、眞理の上にはないこととなりて居る。實際に輪回轉生の考は、人生自然の感情より來れるものであらう。斯くいふと、自分の落着は如何といふ質問が來るであらう、自分は不可知であるといふより外はない。ユンナ不可知の問題を敢て穿鑿せんよりも、寧自己の本分を盡すやうにするがよいと思ふ。いかに研究しても、昔も今も、有と想ふ者は之を有と想ひ、無と思ふ者は之を無と考るの二類を出てぬであらう。乃て自分は、來世死後の問題は、有無共にこれを自然に任すがよいと思ふ。この自然を佛陀としてもよい。來世の存在は事實である、そこで地獄が怖しい、なんでも阿彌陀様をシツカリ頼んで、極樂に參らねばならぬと騒ぎ立つる者がある。これも一種の迷であると思ふ。(六月十六日)

七二 谷本富君

拜復、貴會愈隆運にて、今度機關雜誌創刊六週年紀念號御發行の由、奉賀候。右に付御下問の來世の義は、暫く之れを從來普通の意味に解し候へば、智的論理の上には無と御答申度候。これは靈魂の別在を認めざると、尙且所謂來世に關しては、適當の認識法なきが故かと存候。而かも威的論理の上よりは、依然有と云ふも差支なきかとも存候。それは畢竟、人間本能に由る迷信とても可申哉。其の狀態は、固より不定にて、或は舊佛敎の地獄極樂の圖の様にあり、或はダンテの詩などの様にもあるべし、孰れにても大差なく候が、小生自身は、今日は此の迷信殆んど根絶致居候。不取敢御答迄勿々不一。(六月十六日)

七三 岡田 朝大郎君

來世に關する卑見御求め有之候へ共、全くの門外漢、何等の意見も無御座候間、此旨御答申上候也。敬具。(六月十六日)

七四 三島 中洲君  
來世猶今世

多忙不能詳述理由狀態讓之他日(六月十六日)

七五 姉崎 正治君

小生は、古聖が多く考へたる外、新意見を附するの要を見ず。大家の高見」よりも、一般人民の意向を見たり所存なれば、御答は致さず候。(六月十六日)

七六 角田 柳作君

來世に關し、愚見申述べよとの御狀、委細承知仕候。とあつて、扱てつらく考ふる様は、小生未だか様の問題を熟考も致したる事なく、時々古の文讀む折など、夢の如くに頭を掠め去ることも無之りしには候はねど、未だ生を知らずとも何とも思はざる中に、早其問題は消えてなくなるが常にて、從て、コレが來世に關する愚見に候など、改まりて申進せる様の確信は、從頂到趾、何所を探ね候ても一向に無之候。就ては往復端書にて面倒相掛け候御手敷を謝し、無言に引きさがる可き等の處、扱て考ふれば一と理屈つき候様に思はるゝを、之を機會に一と愚見構えて、諸賢の是正を仰がんも面白かる可しと存じ、一室にも籠らず、人なき所もウロツカず、ツイ、一寸案じ出

したる、ハ、 ホヤ ノ 意見 を、御來諭のまゝに項を分ちて述ぶるこそ如下。

(一) 來世は確に有之ること疑ひなし。こゝに來世といふは、時間上の來世にて、固より現人間と全く性質を異にしたる世界の謂にはあらず。現世と何等因果の關係もなき歴史の連鎖なき別天地に至りては、吾等思致の埒内にはあらず。我の一生より見ての來世なり。子々孫々に在りては勿論現世なり。

(二) 過去ありての今なり。今ありての未來なり。三世ありての世界なり。其一を廢せば三者共に空す。認識もたつ所なく、道徳も依標を失ふ。

(三) 其状態は進化の遞次に一步を進めたるの状態なり。神性の一層顯現せる状態なり。吾等が一層満足の心もて眺め得べき状態なり。

(補) 統體の進化は個體の努力と犠牲とによりてなり、個體の努力と犠牲とは唯統體に於て其果を得。統體は神也。神は三世に遍滿す。吾等は吾等の努力と犠牲とによりて永生の神に歸入する也。

以上、取捨は御隨意に可被成候。(六月十六日)

### 七七 山路愛山君

啓上仕候、小生は、死は睡眠也、生は醒覺なり、今生は記憶を失ひたる過去世より來り。更に新しき來世に移るべき一醒覺の時期と存候。要するに、吾は造化の大機關に生々死々して、窮期なきものと信じ候。(六月十六日)

### 七八 寶山真雄君

拜復、來世の有無如何の問題は、寧ろアナクロニズムに屬せずや。我は社會の一點なり、生物の一個體なり、萬有の一現象なり、絶對に對する相對なりと知られたる、而して我の外に社會もなく、生物もなく、萬有もなき事、明白なる今日、我の生死もなければ、起滅もなし。已に生死起滅なければ過現未もあるなし。唯た今日あれば今日の我あり、明日あれば明日の我あり、との見地よりすれば、現世は過去の未來にして、又未來の過去なり。我の先祖は第一の我にして、我の子孫は第二の我なり。我は無始劫來盡未來際まで、世々毎に姿を變へ様を改めて向上しつゝあるもの、來世又來世、限なく、其状態は過去の現在に於けると等し、豈に他の奇特事あらんや。(六月



十六日)

七九 高木 壬太郎君

拜復、小生は左の理由に基き、未來世を信じ申候。

一、人の智識的、道徳的能力は無限にして現世の限りある生活の要求するよりも大也。而して人は此能力を十分に發展すると能はずして中途に死す。若し此世に神有り。而して此世界は合理的也とせば(余は此の如く信ず)此不權衡は未來世ありとするに非ざれば説明し難し。

二、此世に在ては人々適當の應報を受くると能はず、義人却て義のために苦めらるゝの奇觀あり。此の如き不調和は、未來世ありて、爰に正しき應報ありとするに非ざれば解し難し。但し應報を望むは利己心より出づるに非ず、唯永遠なる攝理の公義を辨證せんとするのみ。

三、余の信ずる宗教(基督教)は明に未來世の存在を教へ、此間聊かも疑義なし、未來世の状態に關しては小生は左の如く相信じ申候。

- 一、事業の永存若くは子孫の永存に非ず。
- 二、宇宙の本體に没入する事に非ず。
- 三、個人的生命の永存也。但し此永存は靜止の状態に非ず、斷へざる成長發展の状態也。

右貴答迄如此に候。早々。(六月十六日)

八〇 三輪田 眞佐子君

所謂宿世浮世及來世は、畢竟相待的の區別にして、絶待には、唯無限の長時間存續すへき浮世あるのみ。今若し相待的見地を以てせば、浮世は同時に宿世なり、將來世なり、故に浮世なくば來世なく、亦宿世なかるべし。現に浮世あるなり、何を來世なきを得んや。さればものは、浮世に於て、力の及ばん限り、道徳を修せんことを志すを以て足れりと信ず。(六月十六日)

八一 加藤 文雅君

天地法界は本佛の境界なり。本佛の妙體は法界に遍ねく、三世に亘る。南無妙法蓮華

經は、本佛の御名にして、亦吾人の寶號なり。故に吾人は、本佛同體の御子なり、其壽命過去悠遠なるが如く、未來も亦悠遠なり、未來を訝かるは、明日を疑ふの愚なり。未來實在の理由は簡明なり。過去より來れる吾人の現在を確信すれば足る。未來は地獄にも遊ばん、十方の佛土をも見舞はん、去れど吾人の誓願は、本佛本化が示せる因縁約束に則り。生々世々、日本國に生れて。法界成佛を實現し、以て世界人類を救はんとするに在り。

終に一言す「未來の有無」なんぞを、佛教徒に問はるゝまでに、信仰の墮落せる所謂佛教徒を憐む。(六月十六日)

八二 伊藤 銀月 君

來世の有無に就いて、思ふ所を述べよとの仰せ、面白く感じ候まゝ、左に申上候。

來世が無い位なら、人間詰らなくつて生きて居られるもんか。さればと云つて、僕の所謂來世は、哲學者の云ふやうな、取止めのないものでもなく、宗教家の云ふやう

な、悠張つたものでもない。又科學者のやうに理屈で固めて、細胞が引くりかへつたの、原子が這つたのと、顯微鏡を通して來世を見やうとする氣もない。

僕の來世は、どちらかと云へば、淨瑠璃や芝居の來世に近いのだ。それも極樂へ行つて、フラ／＼した蓮の花の上に、二人で坐つて見たいとか、三途川や死出の山を、トボ／＼と歩く姿がイキていゝとか云ふんぢやない。そんな罪の深い考へは持つて居ない積りだ。僕のは、唯、死んでは又生れ出て、又死んでは又々生れ出て、限りなき過去から、限りなき未來迄、人間は人間の境涯を御免蒙りたいと思つても御免蒙られるもんてなく、生と死とが晝と夜との如く、代る／＼繰返されるもんだと思ふだけで。

男女が情死をしたら、屹度再び何處かの世界へ生れ出て、初めの障りがあつても、到頭一緒になれるものと信じて居るよ。友人の關係でも矢張り其通りて、管仲鮑叔の如き、伯牙鐘子期の如き、其後必ず幾度も色々な世界に生れ出て、友情を盡し合つて居るに違ひない。親子兄弟も矢張り其通りて、親が子の子に生れたり、兄が弟の孫に生れたり。妹がハッ母さんになつて、姉さんか娘になることもあるかも知れない。

此地球ばかりが人間の住み場所なのぢやない。死んで更に生れる時は、大宇宙のどの地球に産聲を上げるか分らぬ。それから此地球がだん／＼冷えて来て、人間が住めなくなつても。ちつとも困ることかない。此地球に照る太陽ばかりが天道様ぢやない、他に天道様が幾つもあり。地球も新しいのや古いのや澤山にあるのだ。

こんな風にても思つて居なくつちやア、人間世界の詰らないこと、逆も一日も眞面目に生きて居るに堪へるもんぢやないよ。寄語す、青年男女諸君！此世界が若し諸君を容るゝに吝であつたら、宜しく詩人に嬉しがられる情死をやり給へ、天國のやうに、餘り好過ぎていけない所や、地獄のやうにいやな所ではなく、此地球よりはズット譯の分つた地球に生れて、苦樂を共にし得られるんだもの。いぢやないか。(六月十六日)

八三 原千代子君

山は、土佐繪のまろらかに、四時のみどり、四時の霞。

海は、荒波とはに立たせず、たつはさゝ浪か、浪の真砂子は眞珠白珠打ちしく小松

原。魚は、櫻鯛

野邊には、蓮花草、たんぼ、すみれ、とこしなへに萎れ枯るゝことなく、麗はしても棘もつ薔薇は淨界の花にあらず、なつかしとても血になく時鳥は極樂の鳥にあらず。

迦陵頻伽は知らね、鶯こそさなけ。

そよ吹くは春風、みそらに降るは花か、いと妙なる香に舞ふや胡蝶の翅。

陽炎もゆる川の流れ深からずして玲瓏たり、みなそこには金砂銀砂、せかるゝ水の聲、さら／＼としてとはにかなづ美妙の樂。

池のちもには、白蓮紅蓮咲さみち／＼て塵をだに見ず。

花をかざしの天津乙女は、薄ものゝ装すそながやかに、あゆむかと思へば虚空にあり。

實にや極樂てよものには、五障五従の女人こそよさはしけれ。彌陀如来もかくこそほすらめ。あなかしこや。(六月十六日)

## 八四 香取秀真君

生きの世の今の現に御佛の來世の有無は定めかねてき此の世よければ  
息の緒の絶ゆる即ちよもつべの死の大王我に教へん來世の有無を

現身の此の世なる間は過ぎし世も來ん世も知らじ樂しく終らな苦しかりとも

生死の界に立ちて次の世の有るとし思はゞ念佛を申さめ神の名も呼ばめ

日の照すはしき此の世は四つの時行き去り來る樂しからずや物な思ほし

七寶莊嚴雲珠の世は歌に見るべし書にし見るべし今の現に

右六首のうたをもて答へ奉る、猶意をつくさる處あり。(六月十六日)

## 八五 湯本武比古君

一余は、現世界と、別に幽冥界ありと信ず。

二余は、現世界の生活を終りて後は、幽冥界に於いて、永く靈魂的生活をなさんことを期す。

三余は、幽冥界に於いて取る所の方針を、左の如くに決定せり。(これ余の安心立命)

1、余は所謂大我にも歸せず、涅槃にも入らず、余は現世界に於ける人格相當の靈格をば、又幽冥界に於いても保たんと欲す。

2、余は所謂天道又は極樂に往生するを欲せず、况んや地獄に行かんをや。

3、余の靈魂は、生前相愛し相親しめる一家族、及び其の子孫を捨て、他に行かざること、猶ほ生前の如くなるべし。

4、余の靈魂は、小にしては永劫子孫を冥助し、大にしては極天 皇基を護るべし。(六月十六日)

## 八六 後藤宙外君

拜復、普通の意味に於ての來世は、小生に取りては未決の問題に候。有無ともにかとは申あげかね候。勿々。(六月十七日)

## 八七 内田周平君

南無阿彌陀佛。北無阿彌陀佛。十萬億土西與東。天地何曾有此物。

右は、我邦先儒の詩に有之候、小生もこれと同見に候也。(六月十七日)

八八 戸水寛人君

拜復、小生儀來世の有ることなどは信じ不申候。若し果して來世ありとの事に候はゞ、何卒宜しく御證明被下度、希望仕候。草々頓首。(六月十七日)

八九 茅原華山君

拜復、生は全然所謂來世なるものを信ぜず。前世、當世、來世といふは、此世界に於ける前世、當世、來世にして、我には現世を立脚地として、以て一萬年の往古に遊び、以て三千年の來今を察し、而して繼往啓來の事業を爲して、不朽に入るの外なきを知る。不朽とは、三世の謂にして、時間とは唯不朽の或る部分をは、人爲を以て計量するに外ならざれば、時間的生活と不朽的生活とは一にして二ならず。(六月十七日)

九〇 丸山通一君

- (1) 天地萬物は、箇々の物體としては消長變化極まり無しと雖も、宇宙は、全體として吾人の死後にも存在すべし、若し之を來世と稱せば、其の存在や疑ふべからず。
- (2) 天上又は地下に、極樂又は地獄と稱する類の別世界ありて、善人又は惡人が死後に應報を受くべき所、之を來世と稱せば、其の存在や信すべからず。

- (3) 現身の儘か、靈妙清淨なる氣體に化してか、禽獸又は天人の身體に移住して死後に復活し、或は火焰の如き形狀の魂魄として永存するを來世と稱せば、其の存在や信すべからず。

- (4) 吾人の自覺は、現世の生活に於ても生滅盛衰あり、誕生臨終の際に自覺の缺乏するは言ふ迄もなく、其の反覆して殊に著しきは睡眠状態なり。斯くの如く、吾人の自覺は、其の生滅盛衰共に現身の状態に伴ふが故に、身體の衰滅と同時に、自覺の衰滅すること推して知るべし。吾人の現身を組織する諸力(物質も畢竟エネルギーの發現に外ならず)が他日更に或る種の結合を爲して、新に自覺の生ずることありとも、其が前世の存在を自覺する繼續的自我なるべきや否や、是れ吾人の科學的智識の及ばざる所なり。精神に異状なき人にして、前世の存在を自覺する者は、未だ會て有らず。現身の分體たる子孫さへ、各別に自覺を有する獨立の自我たることは、其の父母も疑はず、吾人の知る所は是れのみ。

(5) 來世に關する吾人の智識は斯くの如く陰性なり、若し徒らに來世を信じて、現世に於ける自我の發展を怠らば、悔ゆとも及ばざる時なからんや。今日の義務は今日盡くし、現世の事業は現世に完ふすることを勉むべきなり。吾人の活動は、エネルギーの發現なれば、當に功業として後世の記憶に存するのみならず、陰に陽に、後世を動かすべき實力なり、之が永存を信じて樂むを、有限的生活に於ける無限的生活と謂ふ。(六月十七日)

九一 棚橋一郎君

拜復、其有無は、小生存不申候。但、身後の毀譽、家門の盛衰に關係せる範圍内にては、來世の實存を確信仕候。従て來世は、人世の徳否を判定する世界と認定可致乎。呵々。(六月十七日)

九二 富士川游君

來世の有無、御問合の趣は了承致し候へ共、簡單の答辯には當惑仕候。來世の有無を言はんには、靈魂不死の問題を、失つ決せずばなるまじと思ひ得へども、これは中々に議

論を要し候事と存し候。小生の信仰する所にては、心理學上に精神と名づくるものは、意識の現象外ならざれば、この精神が、身體の死後に殘遺すべしとは信すること能はず。然れども、今日の心理學が、尙ほ全く説明すること能はざる精神現象に、靈魂(獨逸の Geist)を用ひて其意を現はすべきかありとせば、これは遺傳の方則によりて、親子に、子より孫に傳はるものなれば、この意味にての來世は、確かに之ありと申すべく候。即ち來たるべき時代 Generation は、來世に之あるべく候。右に申上げ候處は、從來の宗教家の間に行はれたる來世とは、固より其趣を異にするものに有之候へども、個人生活の未來を想像するに於ては、同一の點に歸し可申候。而して此の如く、論すれば、來世の存在を説くに、學問上の信仰に反せざるの利益有之候事と存し候。簡單の辯にては、其意を盡さず候へ共、右概略卑見を申述候。(六月十七日)

九三 海老名彈正君

尊書拜見仕候。來世について、意見可申述義御申越の處、大問題にて、簡單に難申上候。然し御雜誌御創刊第六週年に相當致候由なれば、僅々一言丈御祝までにて可申上候、

問題は三段に區別しあれば、小生、先第一番に有と確答仕候。其理由は物質すら不窮、況んや自覺の不滅をや。分子すら不滅、況んや品格をや。神は愛なり、何ぞ其愛子の消滅を欲せんや。第三問、即ち來世の状態に付ては、一言にて御答可申、即ち未詳。右御返事まで、草々。(六月十七日)

九四 荻野仲三郎君

貴誌創刊第六週年紀念號御發行之由、目出度御祝申上候。就ては「來世に就て」何か意見を申せとの仰には候得共、別段申上る程の事も無之、小生は、宗教上の信仰として、佛の所説に依りて、來世を信じ候。其状態の如何なるやは、別に考へ申さず、我等聖き、罪惡の子が、如來の慈光に浴して、命終の後は、如來の淨土に往生するもの、心得居候。常識主義とやらには、多分外れ居り候事ならんも、所信右の如き次第なれば、露骨に申上候。此以外に申上る程の事は無之候、終に貴志の萬歳を祈り申候。(六月十七日)

九五 渡邊又次郎君

凡俗の來世説は、どうしても信ずることは出來ない。これは今更ら辨せずとも、御察してあらう。然し、今生活と云ふ語を廣義に見るならば、吾が死後に於ても、或種の生活はあると云つてよいので、即ち來世はあるのである。勿論此來世と云ふのは、吾が今日の生活の具體的全部其儘のもの、再生するを云ふのでない。吾が生活中の物的生活は、吾が死後でも、子孫及び吾が屍體の上に行はれて居る。又吾が心的生活に酷似するもの、多量が、子孫の心的生活となりて現れ、又少量ながら吾に或る關係を有した人々の心的生活中にも現はれて出るのである。これが吾が來世である。(六月十七日)

九六 平井金三君

蠻人の中には、宗教無き者稀に有りとは聞けど、古から今迄何の國にも之無き處は有らざる可く、寺に建物の中最も厳しくて且麗しく、何物は扱置き人の之に手を盡くす有様を見れば、來世と云ふ事に付、心を悩まぬ者無きが如く、法の道談る人の説き玉ふ處を承るも、死んで行く先の論は、いと重々しう感なり、去れど退いて事の眞想を窺

ひ、熟ら之を考るに、廣き世の中で、來世に心を痛むる人の數は果して外觀に見へ、又人の言ふが如く、左程多ら者なるにや。稚兒等は固より何の考も有る可き等無く、若い輩は、來世の話に耳傾くるとさへ厭ふて、寺などには寄つきもせぬ。西洋にては未若き乙女、男の寺に詣づる者多きなど云ひはやせど、さて其處に集へる人々を、すらり見渡せば年榮なる者の數こそ遙に多かり、偶々若き者あらは、そは、いと異しき企畫を心に秘むる、衰許の者にぞ有るなる、此度ロシヤを撃ちに撃ちて世を驚ろかした吾軍人たちの心情如何と思ふに、來世の事を、兎や角思ひ煩ふ趣にも見へず、中には守札など膚身に着く者有由は聞けど、そは來世を信じての沙汰には非ず、反て守札の利益に因り、傷も負ふまじ、命も棄まじと祈る記にて、大概の人は、來世よりも、先づ今世を思ふ心深きは之にても能く知らる、孔子が「生を知らず、焉んぞ死を知らん」と垂示したは真心の底を、さらけ出した言葉で、是が多くの人心を寫した者である、然るに此正直な人間に向ひ連りに來世々々を説き嚇かすは、折角健かなる心を、疾しからしむる者と言はねばならぬ。

斯く申さば、世の宗教家は、吾を鬼の如くに言ひ爲し、鋒尖を揃へて打掛るて有らふが、能く思へ、斯ほど來世が恐ろしくば、何事ぞ、身は人天の師とも有る者が、表に法を説くの殊勝に引返へ、裏には、いたづらの有ん限を仕盡して、大なるは幾百萬の檀越に生佛と仰がれながら昨日まで此世の極樂と見つる伽藍も住居も、明日は人手に渡りて其影をだも止めざらん今日の果敢無き身の上となり、小ぢさは、いと畏し法の袖ぐるみ、珠標ならぬ繩標、赤根刺廣き此日の國に吾から狭ばむ囚の中、生がひも無く暗き世を獨り送るとは、情無や、法の道説く身てさへが、此有様なりとすれば來世の恐る可き事、聲の限りに説きたればとて、又何の爲になると思ふぞ。來世と云ふ言葉は、色々の意を含むが故に、説く者も、説かる、者も、兎角に心行違ふて、夫を如何と定むる事も出來難く、恰、逆業の上の露の如く、是を拾はんとすれば右り左りに轉び運びて止まらんとはせず、強ちに之を衝けば遂に落ちて跡方も無し、去れば先づ其意味を別け定め、此者は如何と一つくに説いて行かよ。一つには、來世とは、今の此時より後、即ち一つの目ばたきしての後も來世で、哲學



者は、時てふとを様々に六ヶ敷言ひ立つれど、世の常の意から言へば、時の上の此來世有る事は今更申迄も無い、去迎之が別に恐ろしい者でも無れば、又嬉しい者でも無し。

二つには、心の開路を辿る人も、一度暗迷を破りて悟覺の境に入れば、覺らぬ前から言ふての來世なり、言ひ換ふれば、覺らぬ此心が死んで、覺りた心と生れ代るなり、覺りた上の此心狀を口に演へ、筆に寫さんには、手にも取られ、眼にも見ゆる形有る物を借りて、其趣を畫くより外に手段は無い、阿彌陀經に在る極樂世界の有様が即これ、金銀、瑠璃、珊瑚、瑪瑙など人々が此世の中で最も愛て喜ぶ物に譬を取り、悟覺の上の心地好き趣味を描寫した者で有るなれど、尙之ても言葉に盡くせぬ喜ばしい境有るから、極樂と云ふ稱が用ひられた、去れば之は來世とは云へ、形無き心の趣を云ふのである。

其と、反對に、今日も覺らぬ、明日も覺らぬ、命終る迄も覺られねば、今より後の月日が取も直さず來世の奈落で、之も矢張心の苦を火の海、劍の山に比喩へ描寫して地

獄と云ふ名を附る、斯ふ云ふ來世の有る事も又争ふ迄も無い。三つめには、この肉體が腐りて後、即ち世の常の意味に於ける死と云ふ事ありて後、目に見、手に觸るゝ如き、形有る地獄と云ひ、極樂と云ふ來世が有るか、無いか、と云ふ事が、世の人には最も喧しい點で有るが、吾には此事こそ最も喧しう無い點で有る。

其理は、骨も肉も朽果、聊か痛さ痒さを感ねば、心に煩など更に有る事無し、それで此境をも名付て極樂と云へば云はふが、地獄と名付く可き趣は少しも無い、去れど死んで行く身には何たる感も無いから、之が極樂なりと心に味ふて無く、來世に在ながら來世を知らぬ、一口に言へば爰に來世は消へて何物も無し。

此三つ目の意義の來世こそ、油斷のならぬ弊で、物知らぬ輩の弱みに付入り、狸法師が業する處なり、それには二つの理が有る、其一つは上より演へ來た通り、來世に色々の意味有るを口に任せて尤もらしく述立て、先にも言る通り、逆業の露と同じく、極めて動き易き意味を何れとは定めず、おぼろぐに説付くるから、無き物迄も有る

物らしく聞取らる、今一つの理は、魂とは如何なる者なるやを心得ぬより、來世を設けねば心に濟まぬ事となる。

して見れば、魂の事も一言云はねばならぬが、世の人多くは之に形有りとし、人の體は朽るとも、魂のみは本來の姿を失はず、吾等が覺ゆる痛痒は、此魂のみぞ知る者と思へども、是皆誤て、心の外の一切物事は先づ眼に觸れ、耳に聞き、口に味ふなど、五つの門を通り越さずは知らるゝ者に非ず、若し魂のみが物を知るなれば、目鼻も口も要らぬ理では無いか、生れ落ちてより、目も盲ひ、耳も聾ひ、舌も鼻も無きか、或は又た感覺神經も無く運動神經も無くば、吾等は此世に在りて、將た何をか感へ、何をか爲し得んや。

抑も魂とは、天地の間に空處も無く、充ち廣される力にて、固より形の有らざる無く、而も至る處として有らざる無し、土くれの中にも、水の中にも、空氣の中、吾等が身の中迄、隈無く染渡ると雖も、形ある者に寄附はては力を示めず事無く、其形の異なるに従て其働を異にす、吾は常に是を火に譬へ、エレキに比らべて説明するので有る

が、火は形無し一つの力なり、之を線香に點れば人目には其火力極て微かに、働も、いと、小さく見ゆれど、眞は力の小さきに非て、添へたる物の形小さきなり、去れば是を大砲と云ふ機に仕掛たる藥と彈とに觸るれば、おどろくの響に天地も搖かん計となる、又エレキに付て言はんには、等しく夫エレキなり、之を電話機に寄せ、車に添へ、ラムプに伴ふ、是等は何れも形有る機械にして、其形、組立は夫々異なるが故に、同じエレキは物を動かし、光を放ち、聲を運ぶ、吾等の魂亦た其通り、昆蟲に入りては昆蟲丈の働を爲し、猿猫に入りては猿猫の働を爲し、人に宿りては人の働を爲す、草、木、石、瓦に潜みては又其丈の働より無く、更に又微分子に藏れては其物丈の力を示めず、而して人に賢さも恐しさも有るは固人と云ふ機械の善惡にこそ因れ、つや

く魂の罪には非ず、猶エレキに變り無れども機械の善惡に因り、働に利と鈍が有る如し、去れば形有る物無くば、魂は何とて働くとを得ん、世の大かたの人は、魂は生物に限りて有る者と思ふ可れども、先にも言へる通、此魂や宇宙に塞る力の事て、火と云ひ、エレキと云ひ、引力、重力など云ふ者は皆一つなれど、其顯はるゝ様の變るに

より、名を異にす、此力が人に在るを心とも魂とも云ふなり、去れば人死んで魂が體を離るゝと云ふ事も無れば、又魂のみが人と同じ感覺を生ず事も有る可らず、是を疑ふ人の爲に、今少しく彼等の知れる事を取りて説示さう。

一つに、この身は死なざる迄も、人能く睡れる時の事を思へ、心の内外に何事あるとも、之を知る事無し、夢は、是れ形有る神経が半ば醒めて、微かに働さつゝ有るに因る。

二つに、酒に酔ふ人は、神經其働を爲さざれば、何事をも具さに辨へず。

三つに、病の爲に、將麻藥に因りて、五體の一部又は全部感覺を失ふたる時は、痛さ痒さを知る事無し。

是に因りて、魂は獨りて働を爲す能はず、形ある者と相待て始て働く事が解かるて有らふ、形骸の何部を取壞ちたる事無き身すら、上の如き状態に在ては、半か、全くか、何等をも知らぬ者が、身も骨も消え失せて、形を止めざる境に至ては、又何物をか感へ、何事をか知るを得ん、たとへ珊瑚の柱に、瑠璃の壁結ふた極樂有りとも、血潮逆巻く荒海に、骨の船漂ふ地獄有りとも、死んだ者に取りて將何んか有らん。

世の中に、死んでの後、如斯來世有るを信とせぬ人有らば、凡そは上に述べたる理由を辨へたる人なり、去れども之は未だ見ぬ行先を理論から割出した考て、言はゞ證據の無い論である、然るに吾は又何たる幸か、來世に苦惱の無き事を身自ら見て來たので有るから、いとも確かな證を持て居る、今其子細を粗まし次に述べよう。

吾、九つか十ばかりの頃、夏の一日荒川に水遊びして居たが、未だ遊ぶ術も知らねば、わんぱく見等と淺瀬に、いたづら、せる折、足踏はずして深みへ陥るや、二口、三口の水を大呑に呑んだ、其時の苦みは筆にも盡し難しなど言ふは、尋常の書き振なる可れど、眞は湯、茶、を呑み誤りて噎ふは、なほ、苦惱かるべし、水食ひつゝも「しまつたり命は終れり」と思ふたが、後はちぼろ、陥れる處より五六間の下に二枚板の橋ありて、川の瀬早ければ陥る間無く、其橋下に押流さる、顔は天を仰て居たと見へ、二枚の橋が見へたから、命拾ふ望が俄に起り、半ば睡れる意識を呼反へしたか、之を抱へんと二たび迄兩つの腕を差し延ばしたれど、手は之れに達さずして橋を流れ過したから「とうとう命は無い」と思ふたを覺へて居るのみで、其後は何事も知らず。

時も何程経たやら、目を開いて見れば、處は遙かの川下、人多數集まりて吾を拾ひ上げ、種々手を盡し命を救ひ呉れたのを始て知り得たが、彼の橋は水より一間半ばかりも高さ處に在れば、固より之を抱へ得可き筈も無し、其時の心は早や夢の中に在るが如く、水に映りた橋影を眞の橋と思ひ捕へんとした者と見ゆ、去れば水に陥る刹那に少こしの苦みは有りたが、橋下を過ぎての後は、只何事も知らぬと云ふ外に言ふ可き事は無し、若し、かの時、人の助け呉れる者無かつせば、今ごろは無き人である、僅か一時か二時の間、死んで居てすら感覺は無き者を、況して骨も肉も形を止めぬ迄に至ては、苦みも、樂みも、心に覺る事の有る可きかは、其感覺無きを、感覺有るに比べて極樂と云ふ名を下さば下すべし、極苦の名に至てはどう有ても下だす可き處はなし。

斯く言へば、意識の不滅と云ふことに反ひくとの議論が公るに違ひ無しから、是も一通り言はねばならぬ、抑も意識と云ふも靈魂と云ふも、又精神と云ひ、心と云ふも、只名が異ふのみで、全く一への者で有る、形は固より無れども、暫く之に形を持たせて

靈魂と云ひ、其働を意識と云ふ、心と云ふは此兩つを兼ねる言葉なり、少くとも予は然る意に用ひ度しと思ふ。

さて人より言へば、此働に二つの有様が有りて、人の目に見ゆる場合と、見へぬ場合とが有る、恰も引力が人目には二つの有様を顯はすが如し、假令手より球を机の上に乗るとす時は、球の動くに因りて引力の働を知り得れども、落ち終りて机に休む時は目に之を見ず、然れども引力は同じく働さつゝ有りて少しも變らず、又エレキに付て言も其通て、之に伴ふ機械全ければ人其働を感れども、然らざれば之を知ると無し、されどエレキは不斷働さつゝあるなり、ガラスの管を摩りてエレキの發るは、常も有るエレキが觸合に因り、人の感ゆる有様に代りたるのみで、エレキが此時始て生れたのでも無く、又其量を増したのでも無い、此感へらるゝ有様と、感へられぬ有様とを暫く假りに表と裏とに名別をする、併し、それも人が見た上の事で、エレキ自らには斯の如き區別は無し。

意識亦其通て、人の體の内にも外にも、廣ごれる力が、體と云ふ機械を中として其内

外の兼合に因り人に感らるゝに至り、始て意識と云ふ名が付けらるゝ、之を表と云ふ可し、さて死んだ上は、吾等を紐上て居た幾億々万の分子と云ふ微き機械を中として、其内外に廣がり働いては居るが、人の目に見へねば、假りに之を意識の裏と云ふ可し。形有る分子が寄合ふて、人の體を作くるが如く、分子を中として廣がる意識か寄合ふて、人の形無き意識となる。

天地の萬の物に皆意識あり、而も一づゝ異なる意識には非ず、一づゝ異なると云ふとは、形の上のとて、形無き者には斯くの如き區別は立てらる可きに非ず、尙ほ空氣や水を、一つくと言ふとの出来ぬが如し。

然らば、人は此空氣や水の中に、人の形なせる圓を結び繞らした如き者て有る故、人生るゝに因り始て意識が生るゝにも非ず、又肉體が溶けて意識が滅びる理ても無い、物理學の言葉に引直せば、物質不滅、勢力持久と云ふとて、意識、靈魂、心など特く數名を附るが故に、生物は生無き萬の物に優り、又人は凡ての生物に優るなど思ふは人の癡見なり。

斯く言ひ來れば、世の人は、吾が沙汰は唯物論なりと言ふて有るゝ、抑も唯物論の唯心だの云ふとは何れも偏奇な考て、天地は唯物物でも唯心でも無い、去れば二元と云はんか、此二元と云ふ言葉も病が有る、何故なれば、物と云はゞ其中に心(意識、又力)有り、心と云はゞ之と共に物も有り、去連二つが一處に寄合ふたるにも非ず、又二つが、かたゝに獨立つ理の者でも無い、只だ吾等が研究の便宜からん爲め、二つの名を設くれども、眞は本來一つで、見る方面が異なるが爲め人の心の中に二つとなりて映るなり、斯くして見れば、天地も萬の物も悉く一つの中に納まり、其間に少しも別けへだては無い、佛の一切平等と説いたは、この事て有る。

然るに、世には、「我」と云ふ者を大に重する者が有りて、上に述ぶる處によれば、此「我」が立たぬ如くに見ゆるから、西の國の人には、此説を堪へ難き迄喜ばぬ者が多い、其は如何と云ふに、八兵衛には八兵衛、伊助には伊助の心(魂)が有りて、而かも是が今世で種々なる事を經驗るから、來世には今よりも一層高尚き心を以て再び此世に生れ來り、經驗ては又死に、三たびも四たびも、幾度も生れ歸ると云ふので、これ

も來世の一つの考て有る、そこで心に形無くしては、此生れ代りと云ふとが出来ぬと云ふので有るが、心は形無き力の働なりとしても此事は容易く説明かすが出来る、今そを最も簡略に説き試みよう。

先にも言ふ通、人の形骸は、意識ある分子が入組合ふて出来る者て有る故、吾此間に會へば、いつも數字を借り來りて説明を試みる、假令、八兵衛は八と八と組合ふて六十四となり、伊助は八、八、八の組合せ五百十二となる、忽ち其内容が違ふから、是を二つの「我」と云ふ、而して此八が二度相乘し、三度相乘して、六十四となり、又五百十二となるとは、人が作り出したのでは無し、自然の法と云ふ者なり、八兵衛、伊助が生れぬ先より此二つの「我」は有た者て、二人は此法に則とりて生れたので有るか、彼等が死ぬるも此法は滅びぬ、恰も紙に墨以て此二つの數を運算するか如く、紙に黒く顯れたるは八兵衛と伊助なり、然らば何時かは知らぬと因縁あらば、此れと同じ數は幾度にも形として生み出さるゝとあるべし、たゞ人は其組合せ極めて入組めるが故に、之を數字てたとよれば單に八の二度、三度、相乘たる位の小さき者には非

ず、幾億万となく異なる數が、彌が上に加へられ、減かれ、又乗けられ除れて其一つの順序、亦幾億万度なるを知らず、去れば是と同じ一つの數が同じ一つの順序で計算せられたらば、何時にても同じ合計が得らるゝとは數學の道理て有るか、因縁の熟ふ時あらば、紙の上に此者が計算出さるゝと幾度もあるべき等なれど、是が幾度も實地に顯はさるゝ機會に至ては極めて少しと言はねばならぬ、六ヶ敷言へば、可能性は有れど蓋然性は至て乏しいのである、これ人となるとの易容からぬ所以て、中にも、再度も三度も此八兵衛、伊助たるの因縁を得るは尙更難いので有る。

而して人一度生れて死ぬる迄の間に、加減乗除は又更に進み行くので有るから、死ぬる時の合計即「我」と生れた時より優れた者と成て居る、従て來世の再生には、此死んだ時の合計が顯るゝとせば、再生の度に高等人間となると云ふ考も出来る、何故なれば、上にも言ふた通、加減乗除の理は自然の法て有る故、分子の此加減乗除は何程にても押し進め、又幾度にも出来得べき理なればなり、然れども斯の如き考は何理論の上の戯に過ぎずして、人の爲には何の益にもならぬ徒事なり、只だ來世を拵

へねば夜が目が安ずらかに睡られぬと思ふ者は、勝手に何なりと思ふべし。今も一つ來世に付て言ねばならぬ事がある、それは俗に言ふ幽霊の事で、死んだ者の魂が此世に、さ迷うとか、生き残るとか言ふ事を、西洋にては、恐らく吾國に増して信する者が多しと思はる。試みに歐米の新聞紙廣告欄を見よ、「スピリチュアリスト」の廣告は何れの新聞にも載て居る、吾も心理學研究の一助と思ひ、これに金錢を投げた事が有るが、彼等「スピリチュアリスト」は先づ幽霊を呼出すと云ふのが觸出で、種々の藝を演し、是皆な幽霊の爲す處て有ると吹聴するが、其術は大概拙劣して下手な素人用品にも劣りて居る、それにも係らず、之を眞の幽霊と思ふ人は中々多く、彼等はあれこれに演說會を開き、雜誌を發刊し日々盛にこそなれ、衰ふ色はなく、吾國ならば直に警察の爲に禁めらるゝので有るが、彼に在ては至る處に跋扈りて、其勢をさ々々侮る可らず、來世を恐るゝ者は果して西洋には吾國より多いので有るが、彼國より教を賣りに來る徒は、日本には迷が道に落ちてあるが、西の國には、其様な者は藥にたくも無いかの如くに言ひ誇れども、其實は迷の空氣が充ちて居る。

そこで學者達は、この幽霊の正體を見究めんとて、心智研究の會などを設くるに至つた、吾も其會員となりて毎週會合ふて色々試験を爲したが、會員は何れも、正直な者ばかり集まりて居るので有るから、手品などする者は無いが、往々奇りた事も顯れて死んだ人と少しも知合無き者へ、其死霊が乗移りたかの如く見らるゝ事も有る、是等は幽霊や來世を信とする人に取りて、最も力ある證據となるので有る、若し果して此が眞の幽霊なりとすれば、先々から吾が言ふた魂の沙汰も來世の沙汰も、破るゝ事になるから、此點にも説及ぶは止を得ぬ、讀む人乞ふ恕るし玉へ。

此心智現象には、遠くの事を知り、又、將來の事を知り、壁や被を隔て、物を見、或は吾意思を他人に通はす杯様々有て、彼の死霊とも思はるゝ者の現はるゝとも有る、吾國の神あるし、巫の口寄など皆是て、人の死んだ部屋に寝て幽霊の顯るゝなどの話は、廣き世界何國にも有るとて、必ず是を荒誕とは言へぬ、併しそは死んだ者が來るのては無い、之に付て吾が説明は次の如し。

先に吾は、分子の意識と云ふとを述べたが、是と同じく分子には記憶が有る、これは意

識と別なる者では無く、一つの力が色々に働くので、此分子の記憶が人の記憶の源で有る、抑も力なる者は間斷無く波を爲して八方に傳へられ、傳へられる者は一つく之れを受け保存して、更に又他へも傳ふ、彼の蓄音器の聲を入れる、管は其聲の波を受けて之を蓄ふ、而して之を呼出だす仕掛が具はれば忽ち聲を發す、これは聲即ち力が分子に保存られて有るからで、之を分子の記憶と云ふ、此記憶は蓄音器の管のみでは無い、一切分子には皆此力が有る、吾が今机に向て書を認めつゝ有るとは吾が四隅の壁、天井、書籍其外一切物に波を與へ、彼等は一つく是を受納めつゝ有るなり、然れば人若し一室に死なば、其状態は悉く其室に記憶せられて居るから、此室に在る人の心が蓄音器が聲を呼起す状態の完備する如く、受感の心状に入れば、死んだ人の姿は顯るゝ理なり。

斯く言へば、吾を以て奇き事を言ふ者と思ふ人も有るふが、今誰にても出來得るとを一つ示さんに、試みに人をして已れの知らざる物を清らかな紙に包むか、封紙に入れしめ、目を閉ぢ心を静めて額に載せしむれば、其物の形若くは其歴史が、畫となりて目

の前に踊出浮動して、恰も着色の活動寫真を見るが如し、之を心讀と云ふ、其物の歴史が顯はるは、其物の分子の記憶が波動となりて日夜漂ふて居る、之を受感の状にある心が感るなり、遠くにある事を知るも此理にして、其出來事は不斷八方に波となりて廣りつゝ有るなれども、人々は目の前の實物にのみ心を附くるが爲め、心に受感の狀態が備て居ぬから知る事無れども、心を空しく某心状とならば遠くの事も知り得べし、是は尤も見易き道理で、實の眼で見ると、一つの物を見んと欲せば、其れに目を注ぐ而已ならず、心をも注かねばならぬ、即ち目と心を受感の状に直接するのである、さて眼中に物が映り眼の底の壁に物が落つるとも、視神経の受感狀が備はらねば、物を見ながら之を見得へぬ、其視神経より奥には目と言ふ者は無い、然るに吾等が能く物を見得るは其物が眼に波を送り、其波は目より奥の分子へ波動して吾等に之を感ぜしむるのである。

つゝめて言へば、力の波動に因りて様々の奇りた顯象が顯はるので、「エレキ」に依りて音信を遠くへ送るも矢張同じ事である、右に述べた心智研究の會に於て、幽靈



等に關き、吾は此波動の理に因りて其解釋を試みた、其時エレキに聲を取り、此力は八方に擴がりつゝ有るから、受感器さへ備れば、電線無くとも音信を通はし得べき理て有ると説いて置たが、今や果して此事は實となりて、無線電信は日露の戦にも驚く可き働を爲した。

然らば、人の死んだ部屋に在らねば幽靈は見へぬかと言ふに、夫には限らず、何處に在ても宜しけれども、此者に關係ある人か物かの側に在れば一層見易き理なり、そは此人又物の分子に蓄へられたる記憶が受感狀に在る人へ移さるゝに因る、去れば此媒介を経て、受感したる者が、己が知らぬ死んだ人を見るのみならず、又其所作を眞似るもあり、又死人に限らず遠くに在る生ける人の顯るゝ事も有り、是等は何れも吾が試験に最も屢々見たる處で、理由知らぬ者は、眞に死んだ人の幽靈が出ると思ふは尤の事て有る。

人、吾を駁ちて曰ん、「果して分子の記憶に因り、遠くの事を知り、被ひある物を見るとせば先きに述べた目、鼻、口其外體と云ふ機械無くんば、魂は其働を爲さずと言へる

論は立たぬては無いか」と。

是は如何にも尤らしく聞こゆれど、まことは左に非ず、其理は、目を以て物を見得る所以を説明した節を能く考ふれば自から明らかなれども、尙一言書を添へんに、既に言ふた通、機械全ければ、力の働も全く、然らざれば働も甚だ鈍くなる、夫故たとへ、目、鼻、口の官能を借らずして物を見、又知らぬ人の事を知ると有りとも、是等官能を経て知る時の如く確かならず、たとへば蓄音器の管は其儘にて分子に波動を受け、又之を放ちつゝ有るは言迄も無れども、之に聲を吹こむにはエレキの機械に掛けて受感性を助くる而已ならず人の其聲を閉出すにも又機械に掛けラツバを副へて聲を強む、人の官能も亦又斯の如し、去れど今官能と云ふ機械を少しも借らずして見、聞き味ふなどするとを得るとしても、魂と物とは決して別かれにくく獨立するとは出来ぬ、何故なれば分子其物の中に意識が備りて居るので有るから、如何に體は腐るとも魂が形ある者を離るゝとはならぬ、して見れば、死んだ者の魂が其儘の姿を維持して極樂に行き地獄に落ち、又此世に、迷ふと云ふ事は、何れにしても出来ぬ事が解るて有るよ。

上より述べたる處を結ばんに、世の所謂來世とは、人死んで後魂の行く處で有るが、魂と云へる一塊の物ありと思ふから、來世と云ふ奇りた一處が無くては濟まぬ如くに思はるゝ、若し魂即ち心は力て有る事が解れば、來世に就ての迷は悉く取去るとが出来る、然るに此來世の苦み樂みと云ふ事を無き者とすれば宗教の根底を破壊し、安心立命は何に因りてか得られんと詰る者有る可れども、眞正の宗教は斯の如き薄弱き者を基礎とはせず。來世を樂むが故に安心を得ると云ふは、今世を厭ふ不安心なり、來世を恐るが故に安心を得ると云ふは、是安心に非ず、恐怖なり、眞に安心立命を得る者豈、來世の爲めに心を煩す事をせんや。(六月十七日)

九七 澤柳 政太郎君

新佛教創刊第六週年に御座候山、益々斯道の爲御盡力之程希望に不堪候。就て「來世の有無その理由、及狀態等」につき、返信用端書に意見を書き送れとの事に候處、此問題ハ宗教上の大問題、單筋に申上兼候。但小子は、萬法唯心を信し、森羅萬象も、過去際より未來際まで、一心に具はることを信し、その見地より、一心の外に來世なしと

ひ得べく候。一心内の假有の法としては、來世ありと申しても差支なく、其狀態は、一心の所變、天國とも地獄とも可相成と存候。(六月十七日)

九八 青柳 有美君

來世は有るか無きか、又其狀態の如何なるものなるか、未だ行ツて見たことなければ知らず。されど、予は約七八歳の頃より、數々「死」に關して種々苦慮する習慣あり、時に便所の中なぞにて、自らの死せざるべからざるものなるを思ひては、何故にこの世に人間として生れ出でしか、若し生れざりせば斯る「死」といふ心地悪しき目にも遇はずして止むを得べかりしになどと、氣を悪くすることあり、今に至るもこの習慣なほ去らず。然るに、予は去る明治廿年中に、親切なる米國婦人宣教師カールラ、ゼー、ハリソン先生なる人の許に通ひ、耶蘇教の話をお聞かせられ、全身洗禮を受け、兎に角耶蘇信者なるものとなり、今日に至れり。この十九年の間に於て、如何なる心理作用に因るか自ら説明し難きも、予が予の死せざるべからざるを思ひて、頗る氣を悪くする度毎に「ナニ！死んでも耶蘇の功德に依り極樂に行けるから大丈夫だ！

極樂は非常に楽しい愉快な面白ところだ!』と氣を取り直し、自ら我が心を慰め、『死』を思ふて感ずる苦痛を消散せしむることになり、三十三歳の本年に於ても、毫も其點に於ては十數年前の頃と異るところ無く、耶穌は予が假令如何なる惡事を爲すも、予を極樂に導きくるものなるべしと信じつゝあり。予が來世の有無、その理由及狀態等に關する質問を受けて答へ得るところは、何人に向つても唯これのみ。(六月十七日)

九九 徳富 猪一郎君

拜啓、御尋の件につき、再度の御書面、甚だ恐入候、先便にて申上候通り、該問題に對しては、考慮中に有之、勿急に申上兼候次第につき、何卒御酌量被成下、不惡思召の程奉願候。拜具。(六月十七日)

一〇〇 梅 謙次郎君

小生は、未佛教の研究せし所も無之候間、難應御需候、拜復。(六月十七日)

一〇一 中島 力造君

今數言を以て此問題に答へんか、認識論上よりは有とも無とも言ふこと能はず。されど倫理學上より人生を觀て、之を否定すれば不満足を感ず、故に予は倫理上の公準(Postulate)として來世の存在を信するものなり。然しそは一の公準なれば、元より科學的にいふ證明にはあらず。(六月十七日)

一〇二 中島 徳藏君

死して如何になり行くか、其は余が知り能はざる所なり。余は唯だ、余が大我的理想を實現したる限り、不死なりと信ず。壽夭は必ずしも問ふ所にあらず、善行を積み行くは、益々永生境に進む所以なりと信ず。(六月十七日)

一〇三 中島 半次郎君

之を手短に申せば、來世の有無を問ふは馬鹿らしき問にして問とならず、生を知らず焉んぞ死を知らんと申す者も候ふべく、之を叮嚀に言へば、古往今來の大問題、人智を究め盡すも解決出來ず、有ると言ひ將た無しといふは、畢竟得手勝手の我流短見と申す者も候ふべし。

前生來世は經驗の範圍以外にして、經驗の意識に上るは獨り現世のみなれば、現世の歴史を唯一の據り所とし、從來の歴史を前生、未來の歴史を來世と取り極むる外は、すべて詮索の限りにあらず、此現世の祖先よりの遺産を受継ぎて之を豊富なるもの高尙なるものとし、子々孫々の末に善美兼ね盡せる社會を見るが如く、すべしといふ今の現實理想混ぜ合せの倫理的宗教が、時を得顔に勢力ありて、之は最も確實なる又最も穩健なる見解に御座候へども、これ以外に來世を言ひ來世を信すべからざるかと申せば、人智は何も獨り科學の證明する所のもののみ限らず、哲學も知識の中にして宗教も理智の方面を缺くべからず、經驗のみが知識の本と申され難く、却りて直覺も知識の一の源たるべく、更に知識の外に感情の働もあれば、哲學なり宗教なり感情なりの上より、來世の有るといふ見解も立つべく、此見解は、哲學上よりするもの、美術上よりするもの、及び宗教上よりするもの、三つに分るべく候。

哲學上よりするものは、萬物皆神より出て、神に歸るといふスピノザ風の解釋、或は來世を假定するにあらずば道德其基礎を失ふといふカント風の解釋に候。美術上より

するものは、恰も有るか無きかの假象の上に美を求め、此美の世界に我心を遊離せしめて之を樂み、之に依りて暫し此現世の不滿を忘るゝ如く、現世とは正反對の理想の來世を描き之に依りて此現世の苦患を忘れ、之に慰せらるゝを指すものにして、プラトー風の見方に候。今一つ宗教上よりするものは、神道なれ、佛教なれ、基督教なれ、其謂ふ來世の意味には差異あらんも、此現世以外に、神の代、佛の御座、神の國ありとする見方に候。

來世を此現世の進み行く世の意味に取るも、將た哲學上、美術上、宗教上より、此現世以外に來世ありと見るも、之は其人の傾向、其人の信仰より來ることにて、一を以て直ちに他を排するは、極めて狹隘の見と存じ候。

小生一己の信仰を申せば、無論來世は有ると見るものにて、其來世は此現實の世の歴史が流れて形作るものと見るものに候ふが、此歴史が流れて形作る來世が、同時に神の代、神の國と見るものに候。此見解は既に基督教の中において、新教が舊教に對して取りたる立場に御座候へども、新教の神學にありては、歴史の進化の考猶明ならず、又現

世が神の代に至る順序と、此兩界の關係とが明ならず、殊に又神の觀念が著るく小生の考ふる所とは異なり居り申候。小生は、此點につき、大體の見當を付け居り、之に應ずる信仰を有し居り候も、之を順序立て、大方に訴ふるには、猶十分の鍛練を要し候。(六月十七日)

一〇四 丸井 圭次郎君

僕の言行はアンチ來世主義的である。併しこれに來世があると信じて居るから可笑しい。其の理由は、此の大問題を端書で返事しろといふ様な、同志會の連中の想像に任すと誤魔化して置かう。(六月十七日)

一〇五 平子 鐸嶺君

一、しらず 二、しらず 三、しらず (六月十七日)

一〇六 望月 信亨君

所謂來世の有無、死後の状態等は、尙幾世紀の間、未決の問題として人間に残さるべし、或は永久不問の問題として、淺蕪なる人の心を、惱ましめほさずとも限るへから

ず、唯だ宗教を信ずるとに依りてのみ、此の問題は直に解決せらる。されど、宗教と  
らへども、既に多種あり、僧侶といふも、人によりて一定ならざれば、設ひ其問題は  
宗教を信ずるとによりて解決せらるゝも、其の答案は素より區々なるを免れず。或  
る者は其の自ら信する所のものを真理なりと言はんも、嚴密に言はざれば、こは其人にの  
み直理なりと信せらるゝに過ぎず。科學を崇拜する者は、此種の問題に否定の解答を  
作るべく、宗教に傾向する者は、多くは肯定の辭をなさん予も亦宗教に傾向する者の  
一人なることを、茲に表白するのみ。(六月十七日)

一〇七 棚橋 絢子君

未來は、過去のある限りはあるものと思はれるが、未だ生を知らず、安んぞ死を知ら  
んといふ語を以ても、有無は容易に極る事は出来ないと思ふ。(六月十七日)

一〇八 井上哲次郎君

來世

意味によつては有り、意味によつては無し。(六月十七日)

今度「新佛教」は、來世についてと云問題の下に於て、來世の有無、其理由、及狀態等の意見を叩徴せり、依て一言之を述て、來問に報いんとす。

凡來世を信認する事は、宇内諸宗教通該の骨子にて、之を信認せざる者は、宗教の範圍に入らざる者と云ふも可なり。然れば、其有無を問ふが如きは、宗教者以外の談にして、宗教内に在ては、固より問題とすへき者に非すと斷定すへきなり。

殊に佛教の三世因果を主説する、其教の宗體を定るにも、實相を體とし、因果を宗とする程なれば、此實相は、廣く無邊の十方に亘り、此因果は、遠く無盡の三世に及ぶ者にて、已に過去有て現在を生し現在有て未來を來すへきは、世相の常態なれば、來世の必有なるへきは、敢て喋々を要せざるへきなり。

所謂三世の物たる、固より有無斷常の二邊を離れたる者なれば、凡夫の妄想分別の如く、「一己單獨の實我とすへき者なければ、平等一如、融通無碍界中に於て、姑く因果關係の別相を現して、假に天と名け、人と號くるも、其實は虛無の身、無極の體に

て、彼我自他の差別を存し乍ら、而も諸法悉く我の法身にて、萬物悉く我の化用なり。是れ諸佛薩埵の妙境、常同常別なる所以なり。此大智見より觀達すれば、一色一香、無非中道にて、草木國土悉皆成佛も空誕に非ず。依正不二、色心不二にして、法界を擧て悉く我の眞證とし、我の境界とす、これ獨り單獨一己の我想到に非ず。一切衆生を通觀して、唯佛與佛の智見に住し、盡十方無碍光如來の徳用に攝化せられし妙境を假説する者なり。其實は不可思議微妙の境界、固より凡慮知識の及ぶ所に非ざるなり。

物して生死を分段に認め、只肉體の上のみに執して、生に始り死に終る者と見るは、凡夫の妄見あり。之に反して生死は只變化の相狀にて、其實始終なく増減なく、刹那々に變移する者と見る、之を賢聖の智見とす。畧答する。(六月十七日)

一一〇 大鹿 愍成君

諸經論中に説く未來世の生活狀態の如きは、要するに各自の宗教的信念に訴へて、之を信賴すべくんば乃ち之れを信じ、之れを信賴する能はずんば乃ち之れを信せずる迄

ものなり。之を強ひて理論的に考證論明せんとするは、却て語るの愚に墮するのみ。之れを有とするも、又之れを無とするも、若し之れを科學的論證立脚よりして云へば、等しく假定の範圍に止るものなり。(六月十七日)

一一一 近角常觀君

拜復、來世問題につきましては、真宗の教ふる所を信じ申候。其所信に至りし経路は、求道第一卷第三號「父の示寂によりて教へられたる眞實證の靈境」、其状態は、同第五號「宗教最高の理想及び是より來る人生觀」に披瀝仕置候。(六月十七日)

一一二 黒田眞洞君

「御寄贈の問題」は、小生等の日々講話候ものにて、珍敷も感せず、又疑問にも置かず存候。佛教五千餘卷の經典、御寄贈問題の理由状態を説示有之爲に御座候。各宗の開祖、佛教傳承の人々の指導に仰き、小生は未だ其以上の見解、教理解釋上の發明も無之、貴君等より見給はし、實に平凡の見解と可笑し給ふへし。去れども、教義の解釋上、佛教傳承の人々の説に依らず、立案するの勇氣と智識とを有せず、耻敷存候。(六月十七日)

一一三 桑木嚴翼君

拜復、來世に關しては、其有無如何は最早問題には非ずして、寧ろ如何か來世を觀ずると申す方問題なるべしと存候。少時より宗教の經驗無之、又普通の學校教育をのみ受け居し小生は、知性より申さば、如何にしても唯物論的來世觀を脱する能はず候も、感情上、未だ之にて満足致し得ず。殊に親しき者の死に會しては、個人的不滅を衷心要求致候。情意の要求即ち實在なりと云ふ事を、十分理性にて満足に會得致候折は、恐らくは小生の始めて解脱致し得る期に候べきか。(六月十八日)

一一四 根本通明君

天地之間。不過往來耳。無有往而不來矣。易云。積善之家。必有餘慶。老子用之。其事好還。言因果轉輪。人一世之間。自有來世。(六月廿日)

一一五 桑原隆藏君

拜復、小生は、今日猶ほ、孔子の未知生、焉知死といひしが如き、境遇に在る者に御座候。勿々頓首。(六月廿三日)

直接間接に、「新佛教」の編輯にたづさはれるものも、蛇足を添ふることせり。

融 道 玄

「未來」に對しては、我徒夙に死刑の宣告を下せり、今に及んで之を再議するの要なし。——但、世の迷者の爲に、ケヤード氏の語を擧示せん。

「宗教上の見解を以てすれば、古人が信ぜし未來生活を、今人が信ずること能はざるに至りたればとて、毫も損失といふに足らず。何となれば、超自然に於て失ひたる者は、心靈に於て得ることもあり得べければなり。(六月十三日)

二

橘 惠 勝

來世といふ語は、通俗に詩的空想に來世といふ、ある存在に解せられて、淨瑠璃などに、未來永々縁さるぞや、いゝ、といふような、迷妄な問答が行はれてある。空想の來世の存在は、我等の眞面目に、有無をかれこれと、いふべきものではあるまい、いふまでもなく空想の産物は、虚妄のことである、さらば來世はないか。理想は時間 に於て無限である、過未無體ではない、三世實有である、理想が三世實有でなければ、

ば、現在も虚妄であるといはなければならぬ。來世といふ語の理想の意義について、古來より東西の學者に、多くの見解があつて、哲學上の重要な問題であるから、輕々しく斷言し得べからざる問題である。現在といふ語に現象を意味せしめて、本體に反對せる語となせるものがある、プラトーンも、吠檀達派も、來世の理想に存在を認めて居る。佛教にての過未無體説も、三世實有説も、本體論上の見解であつて、理想の意義の同しからざるより生したる異義である。これ等の哲學史より見たる問題の説明は、近き來世に公にすべき、予の研究の小著に譲りて、簡約に來世の有無を一言すると、

- 一 來世はある。
- 一 現在主義に立脚する、現象即實在の理想は、時間に於て無限である。無始の本覺は理想の達得に終りて、有始の始覺は、無始の實在に生活するものである。
- 一 因分可説、果分不可説が、その生活の状態である、空想に來世を觀するものは、現在と來世との間に、死の鴻溝をうかつ。我等の理想は、物質的の死なる



を認めぬ、大和民族の歴史的生命の實在は、その一例である。(六月十三日)

## 三

毛利 柴庵

紀念號發行に就き、ハカキ拜見。飛んだ所で十年以前の學校生活を追懐仕候。大講堂にて答案を綴るほどの決心を以て、研究の結果を左に申述べ候。

一、來世はあるものだ。(六月十六日)

## 四

伊藤 左千夫

來世ありや否とは、抑も何たる問ぞ、予は之に答ふるに、秒時の勘考を必要とせず。人或は謂はむ、汝來世を信して秋毫も疑はず、然らば汝能く來世の状態を語り得るか  
と。

天上十里、其状態如何と問はば、予は知らずと答ふるの外なし。地下萬尺の下、其状態如何と問はば、予は知らずと答ふるの外なし。然かも予は、天に十里の高所あり、地に萬尺の下底あることを疑はず。未だ來世に入らざる予が、來世の状態を知らざるは、理正に然るべきにあらずや。來世の状態を知らざるが爲に、其有無を疑ふは思

想健全を欠くに因るや明なり。

然れども、予は茲に重要な附言を爲さざるを得ず。予の所謂來世とは、固く來世を信する者に就ての來世なれば、一般的に、何人にも來世ありとの意にあらず。されば來世を信する人にして、始めて來世あるべく、來世を信ぜざる人に來世ありや否は、予の知る所にあらず。要するに予は只予の來世を信するのみ、予の來世を信するに就ては、何等の理由あることなし。故に如何なる大聖茲に顯はれて、予に教ふるに來世の虛なる理由を以てするも、爲に予の來世を信するの信念は不動なるべきを信す。(六月十六日)

## 五

境野 黄洋

一、來世はないものだ、イヤあらうとは思はれぬといふ方がよい。  
一、あつても無くても、それが宗教上の大問題ではない。未來世界の存否によつて、根底の動く様な宗教は、つまらない宗教だ。

一、無くては不安心だと感ずる人は、あると思つたつて勿論差支のない話した。然

し、未來主義に傾いて、弱きもの、悲觀的のものになつてはならぬ。弊害の伴ふ未來説は、排斥せざるを得ぬ。

一、來世がないといふのは、理窟から言へば、あるといふ證明が出来ぬといふこと、精神と肉體との關係は、分離して存在し作用し得べきものでないといふ學術上の結論に基くのであるが、然し一つは、有ると思はれないとそう感ぜられるのである、そんなものゝあるないといふ争ひは、自分には、寧ろ馬鹿々々しく感ぜらるゝ位である。

一、然し極めて慎重の考量を加へた上、理窟上から無いとは斷言せず、有るとは思はれないといふ感じ丈を、こゝに明にして置く。(六月十七日)

## 六

高島 米峰

吾等の死後は如何、一休和尚答へて曰はく、「めし酒だんご茶とぞなりぬる」と。然り、吾等一死すれば、則ちこゝに吾等の個性は絶滅す、何ものゝ存するありてか、能く現世に於ける善惡の因によりて、來世に苦樂の果を享け得むや。たゞ吾等は、汎神

的實在觀を立脚地とし、自己の活動、社會の進化の上に、永遠の生命あり、悠久の世界あることを確信し、向上不退、以て理想の實現を期せむと欲するのみ。若しそれ強ひて「靈魂の不滅」と言ひ「來世の存在」と言はむか、吾等はたゞこの意味に於てのみ、これを承認せむなり。(六月十七日)

## 七

中村 膽山

無

## 八

田中 治六

現世主義を執れる我徒、靈魂の不滅を無稽とする我徒にありては、所謂來世の存在を信ぜざるや論なし。若し來世にして意義あらしめば、そは將來の現世ならざるべからず。然るに滔々たる世人の、茫漠の間に所謂來世の存在を信ずるものは、或は習慣に盲従し教權に雌伏して、感情の満足を求むるか、或は人生問題を眞面目に考究せざるか、或は之を考究するも、自己の幸福てふ狹窄に没頭するに由れるのみ。人若し廣大なる社會、悠久なる歴史の存續を識り、傳來の教權以外、別個の活眼を開きて天地人

生を觀するあらんか、我徒の主張の、決して偶然ならざることとすべしなり。(六月十七日)

九

加藤 咄堂

死生は宇宙の幻影のみ。一波退きて一波來る。生何の望む所ぞ、死何の厭ふ所ぞ。古來の英雄、未だ曾て未來の生活を想ふて國に殉し節に死したるを見ず。吾人は死後に於ける靈魂の存在を信する能はず、又これを信する能はずして生存に何の苦痛をも感ずることなし。未來の生活を想ふて現世に慰安を得るの徒は、薄志弱行の輩のみ。然れども、吾人を以て死を一切の終結なりと爲すものと誤るなかれ。吾人は、幻の如き現世の一舉一動も、亦宇宙と共に不滅なるべきを確信するものなり。(六月十七日)

一〇

和田 覺二

◎死後に就いて、何の考量を持たぬ人も、死するに差支へはなきものなり。日本人にはかゝるが多し。  
◎死後に關する説も多し、されど何れも要領を得たるは無し。

◎死後の明かならざるは、生前の測るべからざるか如し。しかも現在ののみは實存して、過去未來は無なりと云ふも誤り。凡べての人は此岐路に立てり。

◎過去、現在、未來、共に有に於ても無に於ても等し。其状態の差は知るべからず。

◎死後已に明かならざれば、恐るゝに足らずとなすものあり。電光影裡春風を斬ると喝破する如きは是れ也。

◎死後世界に、善美なる理想郷を憧憬して安心するものあり。

◎皆各好む所に従ふて、安慰を獲得すれば足れり。(六月十七日)

一一

古川 流泉

灯の消えて真くらがりや涼み盞 (六月十七日)

一二

杉村 縦横

來世が有るといふのも外道なら、無いといふのも亦外道だ、有るか無いか分らぬといふに至つては、外道中の大外道である。

一體來世に限らず、現在でも過去でも、是非とも之が有とか無とかいふ、小なる愚な

る範疇の中に入れやうとするのが、抑も間違の初まりで、こんなことを言て居る間は、到底成佛の出来るものではない。

我宗(一)では『來世の有無の如きんば姑らく措きね、即今是れ有か是れ無か』といふ風に來るのだ。俗人原には分るまい、分らなければ『參せよ更に三十年』と來るんだ。』  
しか。(六月十八日)

## 來世之有無畢

明治三十八年八月五日印刷

(定價金貳拾錢)



編纂者 發行所 印刷者 發行者 發賣所

新佛教徒同志會

代表者 高島

山中孝之助

石川金太郎

井秀英

鷄聲堂

發賣所

大阪東區南本町四丁目  
同 東區北久太郎町四丁目  
同 南區心齋橋筋一丁目  
京都木屋町二條  
名古屋本町三丁目  
同 宮町一丁目  
同 鐵砲町  
東京麻布區飯倉五丁目  
同 芝區露月町

積柳松貝川星三森鴻  
原村葉瀨野輪江  
文喜九松文  
兵兵書次次  
社衛衛院助郎店

東京神田區表神保町  
同 神田區小川町  
同 神田區小川町  
同 本郷區本郷一丁目  
同 本郷區春木町二丁目  
同 本郷區南傳馬町二丁目  
同 京橋區町町  
同 日本橋區本石町三丁目  
同 日本橋區落屋町

東京大野富支士堂  
東京金昌堂  
東京江亞英二堂  
東京目黑甚七堂  
東京松邑孫吉堂  
東京前川文昌榮閣

東京市小石川區原町六番地

東京市京橋區築地三丁目卅番地

東京市京橋區四軒屋町廿六七番地

東京市京橋區四軒屋町廿六七番地

東京市京橋區築地三丁目卅番地

東京市京橋區築地三丁目卅番地

井 泷 堂 發 賣 書 籍

文學博士村上專精序  
加藤 呷 堂 著

死 生 觀

死とは何ぞや生とは何ぞやこれ吾人の熱心に研究すべき問題にあらずや本書は著者が多年に研究を傾け盡して古來の哲人傑士英雄烈婦の事蹟に徹し更に東西の學說に考へ終りに此千古の疑問を一大解決と與へたるものにして諸種の人生問題を根柢より論評し加ふるものに趣味ある逸話金を以てす請ふ一本を購ふて勇猛の精神を發揮せられんことを

文學博士前田登雲序  
文學博士南條文雄跋

運 命 觀

人は運命の兒なり榮枯盛衰皆其爲めに左右せらる抑運命とは何ぞや本書は著者が嶄新なる論を以て奮運命觀を鏖破し世界各民族の運命に關する風習を擧げ更に深遠なる哲學的運命論を新運命觀を建設して個人國家社會の運命に關し終りに人生の眞趣を解してこれの開拓策を説き此運命と奮闘して成功の地位に達せるの開運の實例を示す讀め浮世の波に漂へるの秘訣なり開運の鍵を得んとするの徒本書は成功の秘訣なり開運の鍵を守符なり

渡邊國武君序  
加藤 呷 堂 君 著

心 的 英 雄 史

武士道の精髓は其心的修養にあり。本書は古今の英雄を拉し來りて時代の推移と思想の變遷とを觀察し、波瀾あり抑揚ある彼等が行動の裏面には煩悶あり慰安ある心的生活の存するを説破したるものにして、其名は英雄史たりといへども、實は是れ武士道發達史たり、思想變遷史たり。英雄傳たり。隱逸傳たり。若し其れ儒夫をして奮起せしむる彼等の事蹟と秋霜烈日の如き彼等が教訓とに至りては眞に坐右欠くべからざる修養の規箴たるを失はず、趣味に富むことは小説に優り教訓を合ふとは倫理書に過ぎたり。

(新刊)

文學博士井上圓了序  
加藤 呷 堂 著

女 性 觀

美神の權化として崇拜すべきか惡魔の化身としを以て厭わばか本書は流麗の文と獨得の觀察とを併せ女性觀の變遷史の活動的敘述を並に關する等の奇習異俗より名媛才女の佳話を究めて黒面會上の地位を明にし更に職業等が佳話を並に關する象を示し筆を女性の教育に戀愛的嫉妬等成に攔く神か魔か請ふ一讀を吝む勿れ

前東京師範學校教諭 小山左文二著

日 本 文 法 の 解 説 及 び 練 習

全一冊 三百八十一ページ 定價金六十錢 郵税金十錢  
大學豫科、男女兩高等師範學校各専門學  
校入學受験者、並に文部省教員檢定受験者  
書として、中學校、師範學校、高等女學校の學生  
及び小學校教員檢定受験者の參考書として、著  
者苦心の作に係る。解説周到にして明快、載する  
ところの練習問題に一千五百餘。添ふるに明治  
三十年以降本年まで八年間に於ける各種高等學  
校入學試験文法問題及八年間に於ける各種高等學  
校二十年間に於ける文法問題及八年間に於ける種  
種全部を以つてし、文部省教員檢定試験文法問  
題の全年を以つてし、一適切にこれを解説指

醇庵 鈴木券太郎先生著

犯 罪 論 及 女 性 犯 人

(新刊)

● 菊判全一冊 總價金一圓五十錢 郵税金十錢  
犯罪とは何物か犯人とは何物か女性とは何物か  
女性犯罪とは何物か犯人とは何物か女性とは何物か  
爲めに犯罪者となつて何物か犯人とは何物か女性とは何物か  
見地に據り罪を犯すに根本的動搖を興し、女性社會の  
の犯罪に及ぶ生理的根柢、特種状態を詳説し、其人  
毛髮に生ずる生理的根柢、特種状態を詳説し、其人  
の如き亦之を遺傳的、生理的、社會的、環境的、身體  
依其性質を列擧し我國最近の犯罪事件を具體的に  
各其特長を以て詳説し、我國最近の犯罪事件を具體的に  
各其特長を以て詳説し、我國最近の犯罪事件を具體的に  
さ人情の細に入り女性配合の巧み、暴露、其罪惡を  
檢案する處に則ち、利思想的、超自然的、科學的の  
華文字の上を浮き、新刑法學派の一大柱礎、  
り、犯罪學の一大體統、新刑法學派の一大柱礎、  
理想、深遠、崇高、一大文章、此書を指して現世  
紀の一大物、思想界の一大革命、と云はずんば  
將た何物をか指さん實に破天荒の奇書也

發行所 東京市京橋區築地 井 泷 堂  
二丁目三十番地

井 泷 堂 發 賣 書 籍

井 洌 堂 發 賣 書 籍

久米邦武先生著

(新刊)

上宮太子實錄

全一冊洋裝美本  
定價金七十五錢  
郵税金八錢

本書は高眼達識を以て史界獨歩の稱ある前大學教授久米邦武先生が該博なる考證と奇抜なる見解とを以て、日本文明の開拓者なる聖德太子の實傳を詳叙し、荒唐不稽なる從來の傳説を擊破し前人未發の新見地を以て其眞面目を發揮し、太子を中心とし政治、宗教、文學、美術の各方面に亘りて日本文明の淵源を尋ね、其特色を説きて剩す所なく、論は東西に及び、議は古今を悉くす、眞にこれ多く得べからざるの珍書なり。興國の氣運今や熟して人は皆な我が文明の眞知を知らむことを思ふ。本書の出る豈に偶然ならむや。

高橋五郎先生著

日蓮論

菊判全一冊  
定價金六十錢  
郵税金十錢

妙法弘通の聖人として崇拜すべきか將た一世を瞞着する奸雄として厭忌すべきか本書は著者が該博の智識と犀利の筆鋒を以て日蓮が著者が立たる精神より歴史の活動を叙し政界に北條氏教界に念佛宗を大敵を控へ乍ら念佛無間禪天魔を獅子吼して四面楚歌裏に如何にして法を弘通せしやを論究して痛快の斷案を下して蓮の眞面目をして紙上に活躍せしむ聖人が奸雄か請ふ一讀を各勿れ

曹洞宗管長 森田悟由禪師序  
加藤咄堂君 共著  
峯玄光君 共著

禪觀錄

全一冊  
定價金四錢  
郵税金四錢

禪とは何ぞや、曰く言ひ難し、本書は言ひ難きの禪を、説き盡して餘蘊なく、更に發して難き士道の根底となり、凝つて、文學技藝の精華となれる事蹟を描寫し、逸話あり、漫筆あり、神韻縹緲、一讀卷を擱く能はざらしむ。

新佛徒同志會編輯

將 來 之 宗 教

現代名士三十餘家肖像筆跡入  
定價七拾錢郵稅金拾錢

我徒は獨斷を排斥す乃汎く現代の名士三十餘家を訪ひ其の將來の宗教に關する意見を叩いて茲に此の書を公にす

- |        |        |        |
|--------|--------|--------|
| 釋 雲照氏  | 元良勇次郎氏 | 大内 尙樹氏 |
| 清澤 滿之氏 | 海老名彈正氏 | 南條 文雄氏 |
| 坪内 雄藏氏 | 前田 慧雲氏 | 渡邊 南隱氏 |
| 澤柳政太郎氏 | 島田 三郎氏 | 川合 清九氏 |
| 加藤 弘之氏 | 大道 長安氏 | 井上哲次郎氏 |
| 片山 國嘉氏 | 井上 圓了氏 | 村上 專精氏 |
| 佐治 實然氏 | 巖本 善治氏 | 德富猪一郎氏 |
| 江原 素六氏 | 内村 鑑三氏 | 田中 智學氏 |
| 釋 宗演氏  | 中島 力造氏 | 浮田 和民氏 |
| 小崎 弘道氏 | 黒田 眞洞氏 | 本多 庸一氏 |
| 島地 默雷氏 | 植村 正久氏 | 附錄訪問餘談 |

發行所

東京駒込片町十六番地  
東京小石川原町六番地

新佛徒同志會

鷄聲堂書店

新佛教徒同志會編輯

# 新佛教

定價郵 稅共一 部拾壹 錢半年 分六十 五錢一 年分壹 圓二十 五錢郵 稅代用 的節は 一割増

每月一回

本誌編輯員

加藤 咄 堂  
田中 我 觀  
高島 米 峰  
古川 流 泉  
境野 黃 洋  
杉村 縱 橫  
發行所、東京駒込片町十六  
新佛教徒同志會  
發賣所、東京小石川六番地  
鷄聲堂書店

一日發行

時代の精神に伴ふ眞の宗教は新佛教なり。有識者の要求する眞の宗教は新佛教なり。而してこの月刊雜誌「新佛教」は即新佛教の宣布を司る者にして自由討究傳説排斥の大義に基き新信仰を鼓吹し新道德を扶植せむとする者なり。

高島米峰著 第三版出來

## 一休和尚傳

定價四拾五錢 郵稅八錢

元日に體懷を振廻して人の度胸を抜き、末期に養を嗜つて梵天に捧げた彼一休後小松帝の皇子として、九重雲深きところに榮華の夢を見むともせず、一錢一笠、たゞ平民的教化のために一生を送りし彼一休、痴狂かばた一大偉人か、彼が眞面目、そは本書の上に躍上せり。

沼南島田三郎氏序 米峰高島四著 文祿堂藏版(近刊)

## 理想的商業

定價壹拾錢 郵稅六錢

賣るに法あり、買ふに道あり、この法を就き、この道を教へ、以てお客様といふものゝ立場を明にし、以て商人といふものゝ位置を高め、而して買ふものにはうんと買へと勧め、賣るものにはしたま賣れと告ぐるものは、即ちこの書なり。但し讀みたいといふ人に讀んで貰はうがために書いたものにして、もとより讀まうと思はないものに、強ひて讀ませやうといふやうな、そんな不所存は毛頭これなきものなり。

大内清輔氏題詠 釋宗演氏序文 島地默雷氏序文 故老川古河勇著

## 老川遺稿

定價壹圓 郵稅拾錢

天下に率先して新佛教の旨義を鼓吹し不幸中道にして病に斃れたる故老川居士古河勇君が拾九年より廿八年世を辭するに至るまでに成れる百四の雄篇と拾四の書簡とを收む文は文學宗教政治社會に涉り議論あり叙事あり大作あり小篇あり菊版四百貳拾頁盡く一讀を便せざるはなし

井上圓了博士著 寫眞版數十個入

## 西航日録

定價壹拾錢 郵稅四錢

是れ井上博士の洋行土産なり歐米に於ける教育宗教文學政治經濟等の現況は博士が周到なる觀察と輕妙なる文辭とによりて此に躍動する征露の戰爭に於て武名を世界に輝したる日本の國民はまた世界の趨勢に通ぜざるべからず請ふ一本を購へ

賣捌所

東京小石川六番地 鷄聲堂書店

鷄聲堂書店



田中治六著

師範  
教科  
教  
育  
學

定價六十五錢  
郵稅十錢

杉村縱橫註

Facts and Fancies.

定價二十五錢  
郵稅四錢

杉村縱橫譯

強  
肺  
術

定價三十錢  
郵稅四錢

橋惠勝著

淨土教發達史論

定價六十錢  
郵稅六錢

融道玄譯

宗  
教  
進  
化  
論

定價四十錢  
郵稅八錢

東京小石川町六番地 鷄聲堂書店 賣 所

79
601

